

ひら いで めん うち だい い せき
平出免の内台遺跡

平成22年3月

宇都宮市教育委員会

序

古代、うつのみやは河内郡に属し、池辺郷、大統郷、刑部郷、衣川駅家の諸郷があったと言われています。このうちの衣川駅家は古代の官道である東山道沿いに置かれた公的な施設の1つで、ここを通過して、多くの中央官人や軍隊が都と陸奥国を行き来していました。

昭和63年度に本県で初めて東山道と推定される遺跡が発見されて以来、現在までに多くの関連遺跡が確認されており、その点と点を結ぶことにより、おおよそ県内のどの辺りを東山道が通っていたかが分かってまいりました。

本市内においても東山道と推定される遺跡が確認されております。中でも、平成4～5年度に、今回調査区の南方約70mの上野遺跡で行われた調査では、東山道関連と考えられる溝が確認されており、今回の調査で確認された溝はその延長線上にあたることから、一連のものと考えられます。

今回、集合住宅の建設に伴い影響を受けることとなった本遺跡の取り扱いにつきましては、事業者をはじめ、関係機関と協議のうえ、記録保存のための発掘調査を実施することとなりました。その結果、前述の東山道関連と推定される溝のほかに、当初古墳と考えられていたものが、中・近世の塚であることが判明したり、縄文時代及び古代の住居跡が確認されたりと、東山道のルート解明や、中世～近世・近代にわたる地域の民間信仰を知る上で、貴重な資料が得られたものと考えております。

本報告書は、発掘調査において得られた成果をまとめたものであり、多くの方がさまざまな方面で広く活用いただけますことを期待するものであります。

最後になりましたが、埋蔵文化財の取り扱い協議から発掘調査、そして報告書作成・刊行に至るまで多大なるご協力とご理解をいただきました、地権者並びに関係各位、終始ご協力いただきました地元関係各位に対しまして、厚く御礼申し上げます。

平成22年3月

宇都宮市教育委員会

教育長 伊藤文雄

例 言

- 1 本書は宇都宮市平出町字上野に所在する、平出免の内台遺跡・平出免の内台1号塚（免の内台古墳改め）の発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査は石原一男氏が施行する共同住宅の建設に伴うもので、事業主の依頼により宇都宮市教育委員会を調査主体者とし、調査事業主より委託を受けた㈱日本窯業史研究所がこれにあたった。
- 3 野外調査は、平成21年10月5日より11月5日まで実施した。整理・報告書作成作業は、調査終了直後に着手し、平成22年1月末日まで行った。
- 4 調査は、水野順敏が担当し、報告書作成は三輪孝幸が担当した。

5 調査組織

宇都宮市教育委員会

| | |
|-------------|-------|
| 教育長 | 伊藤 文雄 |
| 文化課長 | 森山 和夫 |
| 文化財保護グループ係長 | 大塚 雅之 |
| 文化財保護グループ | 君島 直人 |

日本窯業史研究所

| | |
|-------|-------|
| 調査担当者 | 水野 順敏 |
| 調査員 | 柏崎 広伸 |

- 6 調査記録類及び出土遺物は、宇都宮市教育委員会が保管している。
- 7 陶磁器は山下守昭氏（鶴ヶ島市中央図書館）、銭貨は小林建吉氏のご教示を得た。
- 8 野外調査並びに整理報告書作成において、下記の機関、関係各位よりご助力とご指導を賜った。記して謝意を表する。（敬称略・順不同）

石原一男、積水ハウス㈱宇都宮支店、㈱鈴木宰倫総合コンサルタント事務所、㈱星野組、小林建吉、鈴木敏夫、吉澤 丞、関 巖、今平利幸、神野安伸、山口耕一、大澤伸啓、齋藤 弘、関口慶久、石川 均

凡 例

- 1 遺跡の略号は「HMN」で遺物注記はこれによる。遺構の略号はSI-住居跡、SD-溝跡、SK-土坑である。
- 2 第1図は国土地理院発行1:25,000「宇都宮東部」を部分複製し加筆した。第21図は宇都宮市刊行の都市計画図（1/2,500）「92-1」を部分複製し加筆した。
- 3 遺構図面の縮尺は、住居跡・土坑1/60、溝跡・塚1/80とし、他はスケールによる。遺物はかわらけ1/2、内耳土鍋・陶磁器・土人形1/3、銭貨拓本原寸である。遺物番号は挿図、図版ともに一致する。遺構図面のKは攪乱、Cは炭化物、IPは今市軽石、SPは七本桜軽石を示す。
- 4 遺構挿図の北方位は座標北を示す。断面図水準線は標高を示す。

目次

| | |
|-----------------|----|
| I はしがき | |
| (1) 調査に至る経緯と経過 | 1 |
| (2) 遺跡の位置と環境 | 1 |
| (3) 調査の方法と基本土層 | 4 |
| II 遺構と遺物 | |
| (1) 縄文時代 | 7 |
| a 竪穴住居跡 | 7 |
| b 土坑 | 8 |
| c 調査区出土遺物 | 10 |
| (2) 古代 | 11 |
| a 竪穴住居跡 | 11 |
| b 溝跡 | 13 |
| c 土坑 | 15 |
| (3) 中・近世 | 17 |
| a 免の内台1号塚 | 17 |
| III まとめ | |
| (1) 縄文時代 | 31 |
| (2) 古代東山道について | 31 |
| (3) 免の内台1号塚について | 32 |

挿図目次

| | |
|------|----------------|
| 第1図 | 遺跡の位置と周辺の遺跡 |
| 第2図 | 基本土層 |
| 第3図 | 全体図 |
| 第4図 | S I -2・炉跡・出土遺物 |
| 第5図 | 縄文時代の土坑・出土遺物 |
| 第6図 | 調査区内出土土器・石器 |
| 第7図 | S I -1 |
| 第8図 | S I -1カマド・出土土器 |
| 第9図 | S D -1・2・出土土器 |
| 第10図 | 古代の土坑 |
| 第11図 | 1号塚確認状況全体図 |
| 第12図 | 1号塚 |
| 第13図 | 1号塚遺物出土状況図 |

- 第14図 かわらけ (1)
- 第15図 かわらけ (2)
- 第16図 かわらけ底部拓図
- 第17図 内耳土鍋
- 第18図 陶磁器
- 第19図 土人形
- 第20図 銭貨 (1)
- 第21図 銭貨 (2)
- 第22図 今次調査区と上野遺跡

表目次

- 第1表 周辺遺跡一覧表
- 第2表 かわらけ計測表
- 第3表 内耳土鍋観察表
- 第4表 陶磁器観察表
- 第5表 銭貨計測表

図版目次

- 図版 1 A. 調査区遠景西に日光連山を望む (東から) B. 調査前 (南西から) C. 全景 (南から) D. 全景 (北から) E. SI-1・2 (南から) F. SI-2炉 (南から) G. SK-1完掘 (南東から) H. SK-2完掘 (南東から)
- 図版 2 A. SK-4完掘 (東から) B. SK-5完掘 (南から) C. SK-8完掘 (南から) D. SI-1全景 (東から) E. SI-1カマド (西から) F. SD-1・2確認状況 (南西から) G. SD-1・2完掘 (南から) H. SD-1上面 (硬化) (南から)
- 図版 3 A. SD-1北壁土層 (南から) B. SD-1南壁土層 (北から) C. SD-2遺物出土状況 (南から) D. SD-2中央土層 (南から) E. SK-6完掘 (東から) F. SK-7完掘 (南西から) G. SK-3完掘 (北から) H. 1号塚全景 (南から)
- 図版 4 A. 1号塚北土層 (北北西から) B. 1号塚南土層 (南南東から) C. 1号塚南西部かわらけ出土状況 (南西から) D. かわらけ出土状況 E. 土人形出土状況 F. 中平出の石像物 (南西から) G. 恵比須・大黒を納める祠 (南から) H. 石塚家の石像物 (南東から)
- 図版 5 SI-2出土遺物 SK-1出土遺物 調査区内出土遺物 (縄文) SI-1出土遺物 SD-2出土遺物
- 図版 6 かわらけ 内耳土鍋
- 図版 7 陶磁器 土人形
- 図版 8 銭貨

I はしがき

(1) 調査に至る経緯と経過

宇都宮市平出町字上野地区に、石原一男氏（以下事業主）が集合住宅の建設を計画する区域には周知の埋蔵文化財包蔵地である免の内台古墳（県No3295）が所在した。さらに、本計画地の南方約70mの上野遺跡では平成4・5年に宇都宮市教育委員会（以下市教委）が実施した発掘調査において、縄文時代の住居跡の他古代東山道の側溝と推定される溝跡が3条確認されており、このうち最も東寄りの1条が当地区に延びているであろうことが確認されていた。

事業主の依頼により市教委が平成21年8月18～20日にわたって実施した試掘調査の結果、古墳と目されたものは盛土の状況と出土遺物から中・近世の塚であることが判明した。また、塚の下には数条の溝跡の存在が確認され、その周囲には土坑なども認められ、遺跡名を「平出免の内台遺跡」に変更した。

したがって、開発にあたっては塚及び遺構の確認された開発予定地西端の約400㎡に対して発掘調査が必要との結論に至った。なお、調査対象面積は、前記の約400㎡プラス塚部分の約80㎡の計480㎡であったが、調査面積は計520㎡である。

そこで、事業主の依頼により市教委を調査主体者とし、事業主より委託を受けた独立日本建築史研究所（以下当研究所）が調査実務にあたった。

野外調査は平成21年10月5日より着手した。先ず人力で塚の調査と記録の後、重機により表土を除去して古代およびそれ以前の時代の調査を行った。その結果、上野遺跡第Ⅱ次調査で確認されたSD-1の延長と見られる溝跡（SD-1）とその西にこれに平行するように開削された細い溝（SD-2）が1条、縄文時代の竪穴住居跡1軒（SI-2）と土坑5基、平安時代の竪穴住居跡1軒（SI-1）と土坑3基などを調査した。また、古代の土坑のうち2基は約3.5m隔てて東西に並び、埋積土の状況から掘立柱建物跡の柱掘方の可能性をもつ。上野遺跡の第Ⅱ次調査でも柱間の広い4本柱の掘立柱建物跡が2棟確認されているが、本調査区の方が間隔が広く、南半部は既に削平されていて確認できないなど確定するには至らなかった。

出土遺物は、縄文時代（前～晩期）、石器、古代の土師器・須恵器、中・近世の土器（かわらけ・内耳土鍋）、国産陶磁器、素焼きの土人形（恵比須・大黒他）、砥石、銭貨など多彩である。なお、銭貨は渡来銭（北宋・明）や明治10年の半銭銅貨も見られたが、江戸期の寛永通宝（銅銭1文が主体で鉄銭1文も含まれる）が多数を占める。

調査の途中数次にわたり市教委による現地指導を受け、同年10月31日には終了立会いを受けたが、その後も調査・記録の補足を行い11月4日まで実施した。11月4・5日に器材の撤収等を行ってすべての野外作業を終了した。

整理・報告書作成作業は、野外調査の終了直後に着手し、その後断続的に翌22年1月まで実施した。

(2) 遺跡の位置と環境

本遺跡は栃木県宇都宮市平出町字上野（うわの）地内に所在する。宇都宮市は栃木県のほぼ中央に位置し、平出町は市域の中程にあたる。

遺跡は市域の東寄りを南流する鬼怒川右岸の標高約119mの岡本台地東縁部に立地する。台地の東方直下を山下川が南流し、その東に広がる沖積地（鬼怒川低地）との比高は約7m、現在の鬼怒川までは約2.5kmほどである。

遺跡の立地する岡本台地は、市内岡本付近（旧河内町）より南方の上三川町へと続く台地である。遺跡の西側一帯は昭和36～45年にかけて行われた平出工業団地の造成によって旧地形が失われてしまったが所々浸食谷を持ちながらも東西幅2～3kmほどの平坦面が南北に続いている。

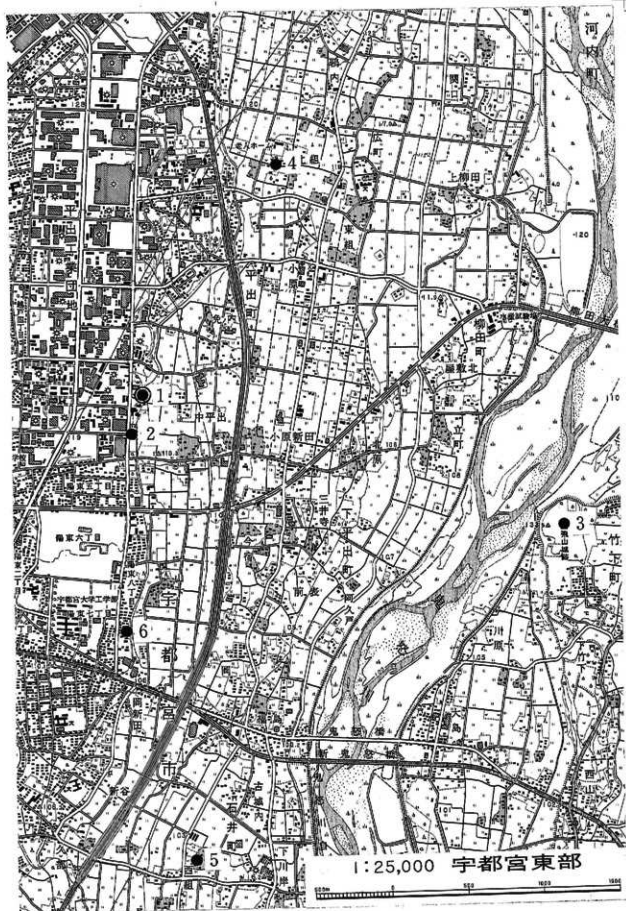
交通的には、JR東北線宇都宮駅の東方約3.25kmに位置し、東下方約0.7kmを新国道4号線（宇都宮環状線）が南北に延び、北方約2.75kmで国道4号線と交差する。また、南方約8.5kmには北関東自動車道が東西に延び、前記の新国道4号線に接して宇都宮・上三川インターが設けられている。

本遺跡の周辺の遺跡は第1図、第1表に示した如く非常に分布が粗である。しかし、これは東側が沖積地となり、西側は前記の工業団地の造成で削平され、さらにその西側は古い段階に市街地化されたことによるものである。本来は台地上に各種の遺跡が存在したと推察され、工業団地の造成時にも土器片の出土があったと伝えられる。

近隣の遺跡を概観すると、南方約70mの上野遺跡では、縄文時代前～晩期にわたる遺物と小型の竪穴住居跡2軒、土坑などが調査され、古代の遺構としては南北に延びる3条の溝、時期不明（古代か？）の4本柱の掘立柱建物跡2棟、所謂「氷室」状土坑などが確認された。なお、古代の3条の溝は立地、形状、規模等から、古代東山道の御溝と推定された。

当地は、古代には下野国河内郡に属し、延喜式によるところの「衣川駅家」の比定地の有力候補とされ、遺跡の東下方には「木の川」という小字名が残る。また、前述の3条の溝のうち東端の1条が途中から他の溝と平行せず北に向うにしたがい東方にそれて延びることから、至近に駅家が存在する可能性が指摘されてきた。これらの溝を南に直線的に延長すると、本遺跡の南方約0.8kmの陽東六丁目地区の東端に至ることから、平成13年同地区の開発に先立ち試掘調査を実施したが、縄文時代の土坑2基と古代の竪穴住居跡（時期不詳）1軒が確認されたのみで、東山道跡は認められなかった。しかし、その後同地区の東方約100mの地点で市教委により所在が確認されており、この付近では厳密な直線ではなく、地形に沿って多少の屈曲を見せるものと推察された。これより南では本遺跡の南方約8kmの西刑部西原遺跡で東山道跡が確認されているが、この間のルートが現在のところ不明である。西刑部西原遺跡の南側では、杉村北遺跡、杉村・磯岡北遺跡等で確認されており、古代河内郡家と推定される国指定史跡上神主・茂原官衙遺跡へと到る。逆に北に目を転じると、本遺跡の北方約3kmの市内岡本地区（旧河内町）に釜根遺跡、この北東約1kmの日枝神社南遺跡でも推定東山道が確認され、北東に延びて鬼怒川の渡河点へ向う。なお、研究者によっては、上野遺跡付近ではなく、この日枝神社南遺跡付近に「衣川駅家」を想定する向きもある。尚、この遺跡の調査担当者は明確な路面（硬化面等）が確認されなかったことから道路と断定するに疑問を呈する。

また、北東方約17kmの那須烏山市（旧南那須町）鴻野山地区に馬屋久保遺跡がある。昭和63年度に道路改良に際して道路が調査され、本県における東山道調査の嚆矢となった。また、その後平成13年度より県埋文センター及び那須烏山市（旧南那須町）等によって継続的に調査が実施され、東山道とタツ街道の交差点、複合的機能を持つと推定される政庁と倉院を備えた官衙遺跡が確認され国指定史跡長者ヶ平官衙遺跡となっている。この遺跡は馬屋久保という地名や炭化米の出土、長者伝説などから、古くより「新田駅家」の比定地とされてきた。しかし前記の調査成果から駅家としては規模が大きく、諸施設が整い過ぎていることから駅家と見るよりは複数の機能を持つ官衙施設との見方が主体となっている。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

この遺跡と本遺跡の距離が今の規定にある駅家の間隔30里（現在の約16km）と近似する点からも本遺跡付近に「衣川駅家」の存在した可能性を高めている。

中世においては、当地は宇都宮氏の勢力下であり、宇都宮城の東方約4.5kmに位置する。本遺跡の北北東約1.9kmに平出城跡、南東方約3.1kmに石井城跡、南南東約5.1kmに桑島城などの宇都宮氏旗下の城跡が鬼怒川右岸にはほぼ等間隔で並んで点在する。さらに本遺跡と鬼怒川を隔てた東南東方約2.9kmには国指定史跡飛山城跡が所在する。この城は、宇都宮氏の重臣芳賀氏の居城であるとともに、古代の堅穴建物より「烽火」（とぶひや）の墨書土器が出土し注目された。鬼怒川左岸の崖上に立地するこの城と本遺跡の間には鬼怒川（絹島）低地が広がっていて障害物がなく、双方の見通しはすこぶる良好である。古代の駅家と烽火の密接な関係を示唆する。

約500年にわたって当地を領有した宇都宮氏は慶長2年（1597）、豊臣秀吉によって改易され、前記の各城はこれに伴い廃城となった。

翌慶長3年以降、当地は明治4年の廃藩置県に至るまで常に宇都宮藩領であった。この間10度に及ぶ領主替が行われたが、最も長く宇都宮藩主であったのは戸田氏で、途中25年ほどの転封があるものの2次にわたり江戸時代中・後期の約130年間統治した。

本遺跡付近は当時河内郡平出村（上平出村，下平出村）に属し、村高は幕末期で3,000石程であった。なお、遺跡の南方約1.5kmの同じ台地東縁部には江戸期と推定される山下台高塚群が所在する。また、遺跡の南方約400mを東西に延びる市道は、かつては宇都宮城より日水戸街道の宿場、道場宿へいたる主要な道路であった。

平出村は、明治22年に石井村他7村と合併して平石村となり、昭和17年より26年、29年と段階的に宇都宮に編入合併された。したがって、当地が宇都宮市となったのは第2次世界大戦後のことで、のどかな田園地帯であったが、第2次世界大戦当時は南方約0.8kmの現陽東6丁目付近に軍需工場の日本製鋼所が所在し今次調査区内にも焼夷弾の落下痕が2か所認められた。事業主の石原一男氏の談によれば、東下方の「水田からその東側の集落にかけて数十発の焼夷弾が落下した。」同家の北に隣接する「新宅の屋根にも着弾したがそれは家人が消火した。」とのことである。

第1表 周辺遺跡一覧表

| 番号 | 遺跡名 | 主な時代 | | | | | 備考 |
|----|--------|------|----|----|-------|------|--------|
| | | 縄文 | 弥生 | 古墳 | 奈良・平安 | 中・近世 | |
| 1 | 免の内台遺跡 | ● | | | ● | ● | |
| 2 | 上野遺跡 | ● | | | ● | | 古代東山道跡 |
| 3 | 飛山城跡 | | | | ● | ● | |
| 4 | 平出城跡 | | | | | ● | |
| 5 | 石井城跡 | | | | | ● | |
| 6 | 山下台高塚群 | | | | | ● | |

(3) 調査方法及基本土層

調査は、北西隅に所在する免の内台1号塚から着手した。現況写真、現況測量（縮尺1/50，10cmコンター）の後、人力で表土を除去したが、表土中にも多数のかわらけ、素焼き人形、銭貨等が含まれていた。これらの出土状況を記録の後遺物を取り上げて、塚の構築状態を調査した。

塚の調査を終了後、重機で表土除去し、古代以前の調査に入った。人力による遺構確認作業の結果、調査区の中央やや西寄りに南北に延びる溝を確認、さらにこの西に並走する細い溝を確認した。また、北西隅に平安時代の竪穴住居跡、これの南側に重複する縄文時代の竪穴住居跡を確認し、調査区東半部には縄文時代及び古代の土坑が点在していた。

これらは平面を確認後埋積土を除去して土層を記録し、完掘して写真撮影を行った。土層図は縮尺1/20、平面図は調査区全面を縮尺1/40で記録した。写真撮影は、三脚・大型脚立を使い、35mm判白黒フィルム、35mm判カラーポジフィルムを使用し、デジタルカメラで補足した。

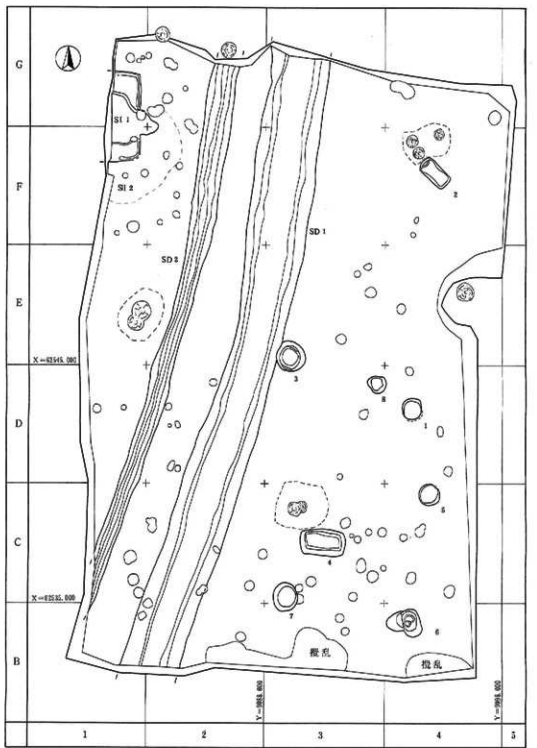
実測には公共座標世界測地系（第IX座標系）を使用し、調査区南西隅を原点とする。原点の座標値は第2図に示した如く、X=62525.000、Y=9078.000である。調査区画は5m方眼としX軸をアルファベット、Y軸をアラビア数字で示す。

基本土層

今次調査区はほぼ平坦な地形であるが、東側が台縁部にあたり沖積地に向かって急激に落ち込む。また台地は南に向かって緩やかに下降し、僅かな高低差が認められる。調査区の北側中央部における土層を第2図に示した。



第2図 基本土層



第3図 全体図

II 遺構と遺物

今次調査では、縄文時代の竪穴住居跡1軒，土坑5基を確認し，遺構内外より土器片（前・中期），石器などの遺物が出土，古代の溝跡2条，竪穴住居跡1軒（平安時代），土坑3基，遺物は土師器，須恵器が出土，中・近世では塚1基，その上部及び周辺部よりかわらけ，内耳土鍋，素焼き人形，国産陶磁器，銭貨（渡来銭，寛永通宝，半銭）などが出土した。

各時代毎に以下に記す。

(1) 縄文時代

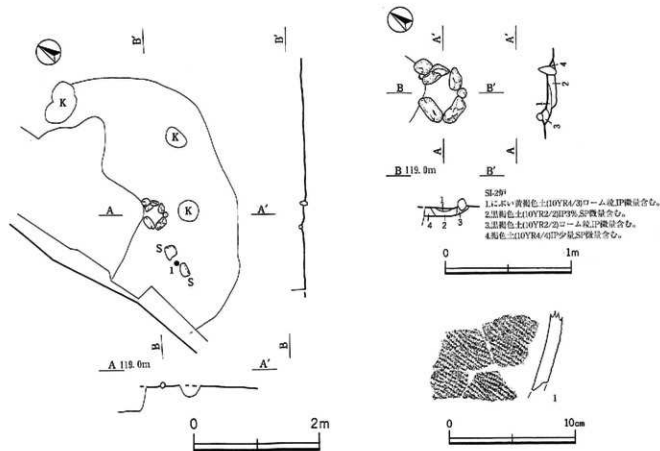
a 竪穴住居跡

SI-2（第4図，図版1）

遺構

該期の住居跡はSI-2の1軒のみである。調査区の北西部，F1・2区に位置し，西側は調査区外に延び，北西部はSI-1に切られていた。また，本跡の上には後世に塚が築かれていた。

平面形は，竪穴の掘り込みが明確ではなく，壁溝や小穴列，主柱も認められず明確にし難いが，床面の痕跡と炉跡の所在から東西約3.5m，南北約4mの楕円形と推定される。



第4図 SI-2・炉跡・出土遺物

床面はローム漸移層上面を利用し、ほぼ平坦で堅く締まっていた。柱穴は床面で確認されず、床面を除去し再度追求したが認められなかった。壁は全く確認できなかった。

炉跡は内法が東西20cm、南北30cm、平面が方形の石囲い炉で、北西隅はSI-1との重複により石材の一部が失われていた。石材は地山を掘り込み確り据えられていたが、炉内に焼土・灰等はほとんど認められず、明確な火床も見られなかった。

遺物

出土遺物は床面に遺存した土器片1点である。

1は中期後半の深鉢型土器の体部片と考えられる。外面に原体Rの縄文を施文している。内面下位に煤が付着する。胎土は粗い。

b 土坑

該期の土坑は調査区東半部で5基確認し、平面が円形のもの3基、長方形のもの2基である。

SK-1 (第5図、図版1)

D4区に位置し、北西1mにSK-8、南約2.8mにSK-5が隣接する。

平面形は、開口部が約90cmの円形、底面が径約80cmの円形。深さは約50cmで南半部は僅かにオーバーハングしており、本来は他も同様の状態であったと推察される。床面はほぼ平ら。埋積土は3層に大別され、第1層中より土器片が数点出土した。

遺物 1~3は同一固体と考えられる。中期後半の深鉢型土器の破片である。外面に縄文Lが施文されている。

SK-2 (第5図、図版1)

F4区に位置し、近隣に該期の遺構は認められなかった。

平面形は、開口部が長さ約138cm、幅約70cmの隅丸長方形、底面が長さ約120cm、幅約45cmでほぼ同形で、長軸方位はN-44°-Wを示す。壁はやや外傾し、深さは約45cm。底面はほぼ平坦であった。埋積土は3層に大別され、非常に締まりが強い。遺物は全く出土しなかったが、埋積土及び形状から該期の遺構と判断した。

SK-4 (第5図、図版2)

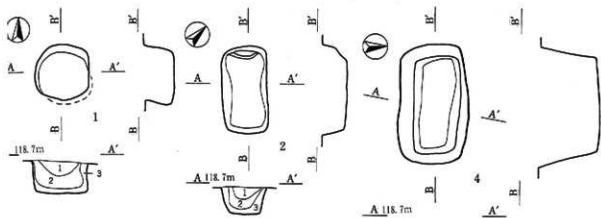
C3区に位置し、北東約3.5mにSK-5、南約1.5mにSK-7、南東約3.3mにSK-6が隣接するが、SK-6・7は後世の土坑である。

平面形は、開口部が長さ約190cm、幅約110cmの隅丸長方形、底面が長さ約150cm、幅約50cmの同形で、長軸方位はN-86°-Wを示す。壁は外傾し、深さ約95cm。底面はほぼ平坦であった。埋積土は3層に大別され、非常に締まりが強い。遺物は全く出土しなかったが、埋積土及び形状から該期の遺構と判断される。

SK-5 (第5図、図版2)

C4区に位置し、北約2.8mにSK-1、南西約3.5mにSK-4が隣接する。

平面形は、開口部が径90×85cmの円形、底面は径70×73cmでほぼ同形。壁は僅かに外傾し、深さ20cm。



SK-1

- 1.黒褐色土 (10YR3/2) ローム状, IP・SP微量含む。埴り極めて強い。
- 2.黒褐色土 (10YR2/2) ローム状, IP, SP微量含む。埴り極めて強い。
- 3.黒褐色土 (10YR3/2) ロームが90%ほど混入している。埴りは極めて強い。

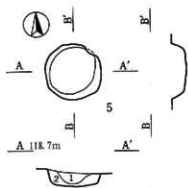
SK-2

- 1.黒褐色土 (10YR3/2) ローム状・IP・SP微量含む。埴り極めて強い。
- 2.黒褐色土 (10YR2/1) ローム状・IP2~10m・SP2~5m微量含む。埴りは極めて強い。
- 3.黒褐色土 (10YR2/1) とローム5:5の混合土, IP2~10m・SP2~10m微量含む。埴り極めて強い。



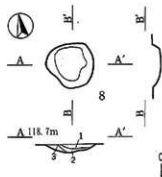
SK-4

- 1.黒褐色土 (10YR3/1) IP微量混入。埴り強い。
- 2.黒褐色土 (10YR2/2) ローム状, IP, SP少量混入。
- 3.黒褐色土 (10YR3/2) とローム状・厚5~50mmの混合土, IP/SP微量混入。埴り有。



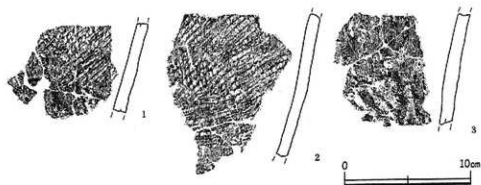
SK-5

- 1.黒褐色土 (10YR3/1) ローム状少量, IP微量混入。埴り強い。
- 2.黒褐色土 (10YR3/2) とローム状・厚5~3mmの混合土。埴り有。



SK-8

- 1.黒褐色土 (10YR3/2) ローム状, IP微量含む。
- 2.黒褐色土 (10YR3・2) ローム状20% IP微量含む。
- 3.黒褐色土 (10YR2/2) ローム状30% IP微量含む。



第5図 縄文時代の土坑・出土遺物

底面はほぼ平らであった。埋積土は2層に大別される。遺物は全く出土しなかったが、埋積土及び形状から該期の遺構と判断した。

SK-8 (第5図, 図版2)

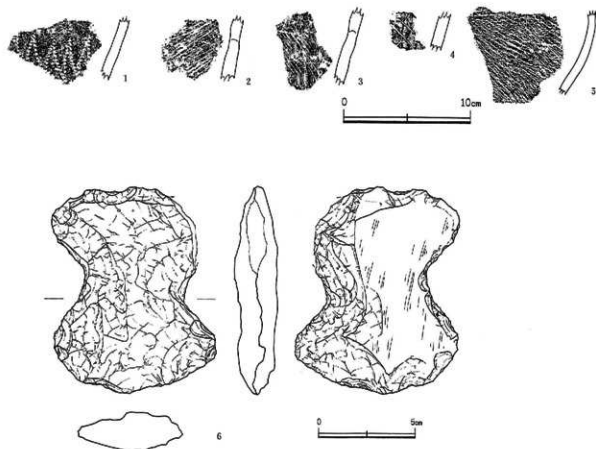
3D区に位置し、南東約1mにSK-1、北北西約2.7mにSK-3が隣接するが、SK-3は後世のものである。

平面形は、開口部が径約75cmのほぼ円形、底面が径約50cmの同形で、開口部西側の張り出しは樹木の跡による可能性が高い。壁は僅かに外傾し、深さ15cm。底面はほぼ平らであった。埋積土は単層であった。遺物は全く出土しなかったが、埋積土及び形状から該期の遺構と判断した。

平面形が長方形のSK-2・4は、埋積土中に今市・七本桜軽石粒を含み、他より埋積土の締りが強いことから縄文時代早・前期の遺構と推察する。平面形が円形のSK-1, 5, 8は形状・埋積土の類似からSK-1と同じ縄文時代中期後葉と推察される。

c 調査区出土遺物 (第6図)

1は前期前半の深鉢型土器の体部片で、外面に貝殻復縁文を施す。2・3は前期の深鉢型土器の体部片で斜めに細かい条線を施す。4は体部外面に平行する細沈線を施す。5は晩期の深鉢型土器の破片で、燃糸文を施す。6は分銅形の打製石斧で、一部欠損する。石質は硬砂岩、重量200g。



第6図 調査区内出土土器・石器

(2) 古代

この時代の遺構は、大小2条の溝と、竪穴住居跡1軒、土坑3基などである。なお、溝は道路側溝と推定されるものであるが、溝の底面及び埋積土中に硬化面が認められたものの、明確な道路状遺構は確認し得なかった。

a 竪穴住居跡

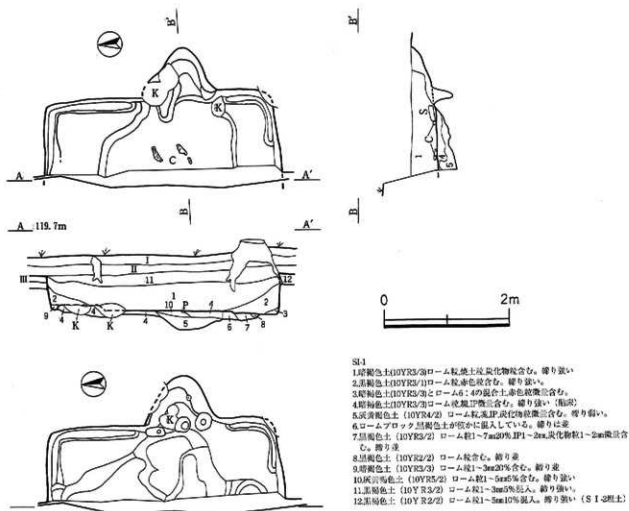
SI-1 (第7・8図, 図版2)

遺構

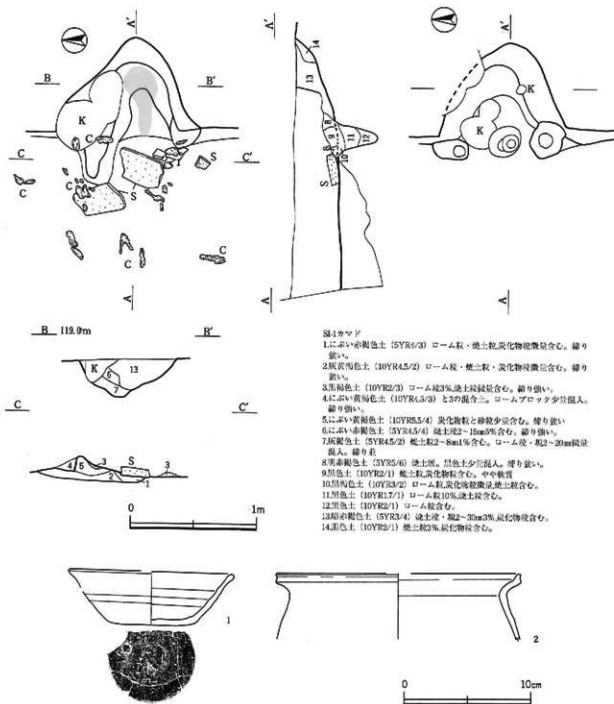
調査区北西隅のF・G1区に位置し、西半部は調査区外に延び、南東部はSK-2と重複しこれを切っていた。また、本跡の上に後世に塚が築かれていた。

平面形・規模は前述の如く明確にし難いが、南北長約3.8m、確認し得た東西長は1~1.2m程で、本来は一辺3.8m程の方形と推定される。

壁はほぼ直立し、現存高は南で60cm、北が40cm、壁高の差は床面の高さの違いによるものである。



第7図 SI-1



SI1カマド

1. 濃い赤褐色土 (5YR6/3) ローム状・焼土粒・炭化物微量を含む。締り強い。
2. 灰黄色土 (10YR4.5/2) ローム状・焼土粒・炭化物微量を含む。締り強い。
3. 黒褐色土 (10YR2/3) ローム状・焼土粒微量を含む。締り強い。
4. 濃い黄褐色土 (10YR4.5/3) と3の混合土。ロームアロツク少量混入。締り強い。
5. 濃い黄褐色土 (10YR5.5/4) 炭化物粒と砂粒少量含む。締り強い。
6. 濃い赤褐色土 (5YR4.5/4) 焼土粒2-15mm5%含む。締り強い。
7. 灰黄色土 (5YR4.5/2) 焼土粒2-8mm1%含む。ローム粒・粒2-20mm程度混入。締り強い。
8. 赤褐色土 (5YR5/6) 焼土層。黒色土少量混入。締り強い。
9. 黒色土 (10YR2/1) 焼土粒・炭化物粒を含む。やや粘質。
10. 黒褐色土 (10YR3/2) ローム状・炭化物粒微量・焼土粒を含む。
11. 黒色土 (10YR1.7/1) ローム粒10%焼土粒を含む。
12. 黒色土 (10YR2/1) ローム粒を含む。
13. 暗赤褐色土 (5YR3/4) 焼土粒・粒2-3mm3%炭化物粒を含む。
14. 黒色土 (10YR2/1) 焼土粒3%炭化物粒を含む。

第8図 SI-1カマド・出土土器

床面はローム層中にあり、中央部は深さ15~20cmの掘り込みを埋めて貼床を施していた。また、前述の如く南、中央、北の三段の床面が認められ、北に向って順次10cm程高(浅)くなっていた。調査着手時は住居の重複を想定したが、土層観察からも重複の事実は認められず、高さの異なるそれぞれの床面上に炭化物の存在が認められたことから、最終段階までこの状態で使用されていたと判断される。幅10~15cm、深さ8cmの壁溝がカマド部を除く壁下に設けられていた。調査し得た範囲に柱穴は認められなかった。

カマドは東壁の中央やや南寄りに壁を大きく切り込み、白色粘質土で築かれていた。カマドは住居の廃絶に際して解体されたと推察され、崩壊したカマド構築材の上に炭化物片が認められた。また、支脚は認められず、焚き口の腐材と推定される凝灰岩が2つに折れた状態で遺存したがこれを支える柱材(石・土器等)は見られなかった。この石材は幅約23cm、厚さ7cm、長さ66cmで、被熱により広範囲に黒色に変色した面が認められた。

埋積土は3層に大別され、第2層に炭化物(材)が含まれ、床面の所々に炭化物が遺存したが、周囲に焼土が認められず、一般的な火災住居と様相が異なる。居住中の火災ではなく、廃屋の処分的な行為によるものであろうか。

遺物

遺物はカマド周辺より、土師器甕、須恵器杯・鉢などが出土した。

1は須恵器杯口径12.8cm、器高4.6cm、底径6.8cmである。色調は灰色で、体部から底部にかけて一部橙色を呈する。胎土に白色粒、2~3mmの礫を含む。焼成は普通。ろくろ整形で、底部はヘラ切り、板状の圧痕が認められる。益子産。2は土師器甕の口辺部片。口径19.3cmである。色調は橙色、胎土の石英砂を含む。

b 溝跡

南北に延びる大(SD-1)・小(SD-2)2条の溝を確認した。

SD-1(第9図、図版2・3)

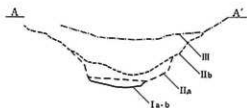
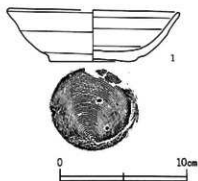
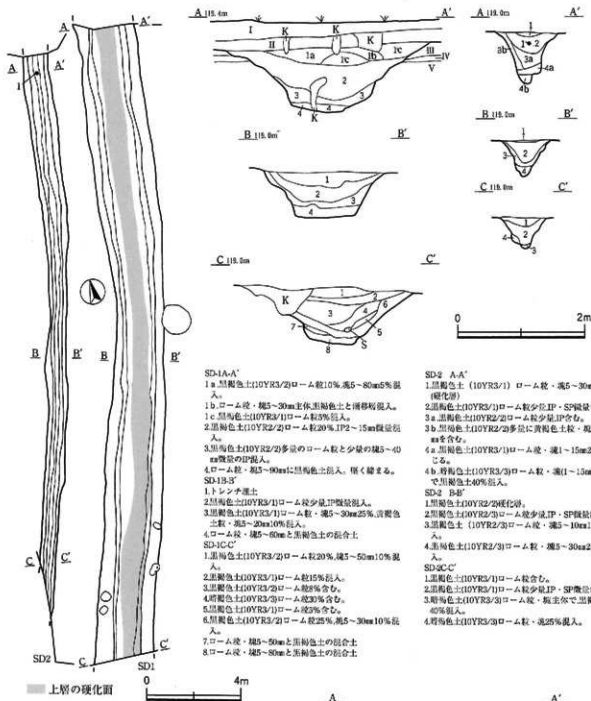
調査区の中央やや西寄り、B1・2区からG3区に跨って所在する。確認面での幅は2.2~2.4m、底面幅が1.1~1.3m、深さ0.75~0.9mで断面逆台形。北端の土層観察では上幅3.5m、深さ1mであった。調査区内では南北長約26.5m確認できたが、南北の地区外に向かってそれぞれ延びる。南半部での軸線はN-19°-Eであるが、北半はN-9°-Eとやや西に方位を変える。南の延長は方向、断面、土層等から「上野遺跡第Ⅱ次調査区」のSD-1に連なると判断される。

埋積土は概ね4層に大別され、第1層は溝のほぼ埋没した段階で人為的に埋め戻したもので、この層全体が非常に硬く締まっていて硬化層と呼ぶべき状況であった。他の層も比較的締りが強いが、底面も非常に硬く締まっており硬化面状を呈する。埋積土中より縄文土器片が出土したものの、該期の遺物は出土しなかった。

SD-2(第9図、図版2・3)

前述のSD-1の西約2mに並走する形で開削されたものである。確認面での上幅0.8~1m、深さ0.5~0.6m、底幅約20cmで、断面V字型。北端での土層観察では上幅1m、深さ0.8mであった。調査区内では南北長23.6m程確認し、南北とも調査区外に伸びるが、SD-1と異なり、上野遺跡ではこれに対応する溝は確認されていない。したがって、両地区の間から設けられたか、西よりに延びて北に屈曲したものと推察される。

埋積土は4層に大別され、SD-1同様にほぼ埋没した段階に人為的に埋め戻された層があり、非常に硬く締まっていた。また、他の層も比較的締りが強い。なお、本跡は幅の割りに深さが有り、埋積土の締りが強いことから、柵列や板敷的なものを想定し、部分的に土層の縦断面を観察したが、そのような痕跡は認められず、溝と判断した。



SD-1と上野遺跡SD-1の変遷の対応図

第9図 SD-1・2, 出土土器

遺物は、北端の上層より9世紀後半代と推定される須恵器杯が1点出土したのみである。

SD-1・2は、規模、断面形は異なるものの、配置及び埋積土の状況から同時併存の可能性が高い。

遺物

1は須恵器杯。口径13.4cm、器高4.2cm、底径6.8cmである。色調は灰白色、胎土の細砂を含む。焼成はやや甘い。ロクロ整形、底部糸切り。三龕産。SD-2第2層より出土。

C土坑（遺溝・遺物）

該期の土坑は3基確認し、いずれもSD-1の東側に所在し、SK-3はSD-1と接していた。

SK-3（第10図、図版3）

調査区の中央、E3区に位置し、西側がSD-1と接していた。残念ながら両者の接する部分に樹木の根による攪乱があって土層観察では新旧関係は明確にできなかった。しかし、本跡の上部の埋積土が硬く締まっていて、SD-1の状況に近似することから本跡が若干先行するか近接した時期のものと推察される。

平面は、開口部が径約1.2mの円形、底面は径約0.7mでほぼ同形。壁は上位がロート状に外傾するが、中・下位は直立に近く、一部オーバーハングする部分も見られた。深さ約1.2mで、ローム層中にある底面には径7～8cm、深さ10cm程の小穴が6口程穿たれていた。

埋積土は5層に大別され、上層は前述の如く硬く締まっていたが、これ以下は締りが弱く、壁面との分離も容易であった。

遺物は、埋積土中より縄文土器の小片が出土したのみで該期の遺物は認められなかった。

SK-6（第10図、図版3）

調査区の南東隅、B4区に位置し、西約3.5mにSK-7が隣接する。

平面は、開口部が南北1.14m、東西1mの楕円形の西側に、南北0.8m、東西0.4mのやや浅い張り出しがある。東側の底面は0.8×0.64mでほぼ同形、西側は東に向かって半円形に下降する。壁は、直立に近い状態であったが、西側は西に向かって大きく外傾する。深さは、東側が0.65m、西側は17～25cmである。底面はローム層中にあり、東側は浅い凹みが見られるが、西側は前述の如く東に向かって下降していた。

埋積土は8層に大別され、ローム粒・同塊を多く含む層があり全体に締りは強い。掘立柱建物跡の柱掘方の感を受けるが、柱痕や柱当りは認められなかった。

遺物は、埋積土中より須恵器片、縄文土器片が出土した。

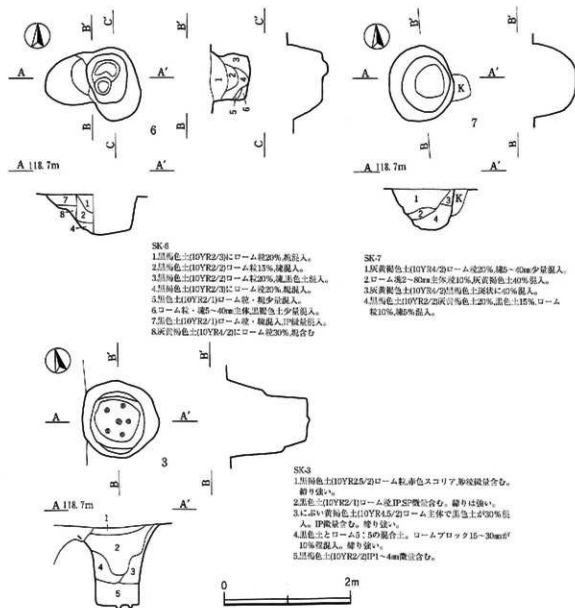
SK-7（第10図、図版3）

調査区の南端中程、B・C3区に位置し、東約3.5mにSK-6、西約3mにSD-1、北約1.5mにSK-4が隣接するが、SK-4は先行する時代の遺構である。

平面は、開口部が南北約1.2m、東西約1mの楕円形の東に40×36cmの半円形の張り出しを認めたが、これは木根跡と思われる。底面は0.88×0.8mのほぼ同形である。壁は西側がやや外傾するが東側は直立に近い。深さ0.65mで、底面はローム層中にありほぼ平坦であったが、底面上15cm程の位置で径約15cmの円形に硬く締まった部分を確認した。柱掘方の柱当りの感を受けるが、断定はし難い。

埋積土は4層に大別され、ローム粒・塊が多く含まれ全体に締まりが強い。遺物の出土はなかった。

なお、SK-6・7は上記のように埋積土の状況から掘立柱建物跡の柱掘方の可能性をもつ。また、両者は約3.5m（芯々で約5.2m）隔てて東西に並ぶが、東・西・北の三方への展開は認められず、南側が調査区外の切り通しとなっていてこちらも確認できなかった。したがって掘立柱建物跡として明確に捉えることはできなかったが、南方の上野遺跡第Ⅱ次調査区においても4本柱の掘立柱建物跡が2棟調査されており、これらも類似の施設であった可能性をもつ。



第10図 古代の土坑

(3) 中・近世

この時代の遺構は免の内台1号塚のみであるが、遺物は塚の上及び周囲よりかわらけ、内耳土鍋、国産陶磁器、素焼き人形、銭貨などが多数出土した。

a 免の内台1号塚

遺構（第11～13図、図版3・4）

調査区北西隅、E～G1～3区に跨って所在し、SI-1・2、SD-1・2と重複するがこのいずれよりも新しい。調査時には既に伐採が終了しており、塚の上及び周辺には径50～70cm程の切株が点在していた。また、かつては塚の周辺に多数の石造物が所在したとのことであるが、全て移設されており全く遺存しなかった。

現況測量の際には一辺10mのほぼ方形で、高さ約0.8m、頂部に一辺5m程の平坦面をもつと推察された。地表面直下より深さ15cm程の表土層中から、多量のかかわらけや内耳土鍋、国産陶磁器、銭貨（北宋・明銭、寛永通宝等）が出土し、主な遺物の出土状況を示したのが第13図である。この段階では、南半部はほぼ円形と見ることが妥当と思われるが、北半部は相変わらず方形に見える。盛土下の調査でも構築に関わる溝などは認められず、当初の形状が円・方形いずれか決し難いが、南半部の状況から円形を基本とすると推察される。なお、現在西と北の隣接地は当地とは地権者が異なり塚の形状もこの影響により後世に改変された可能性も否めない。

盛土は大部分が樹木の根のために土層観察に不適な状態であったが、かろうじて西側はいくぶん観察が可能であった。本跡は、前述の如くローム層にいたるような深い溝などは設けられておらず、周辺の黒色土を集めて盛り上げたと推察され、部分的にローム漸移層上位のブロックが認められるに過ぎない。また、盛土の状態は、第12図の如くであり、全体に締りはあまり強くない。

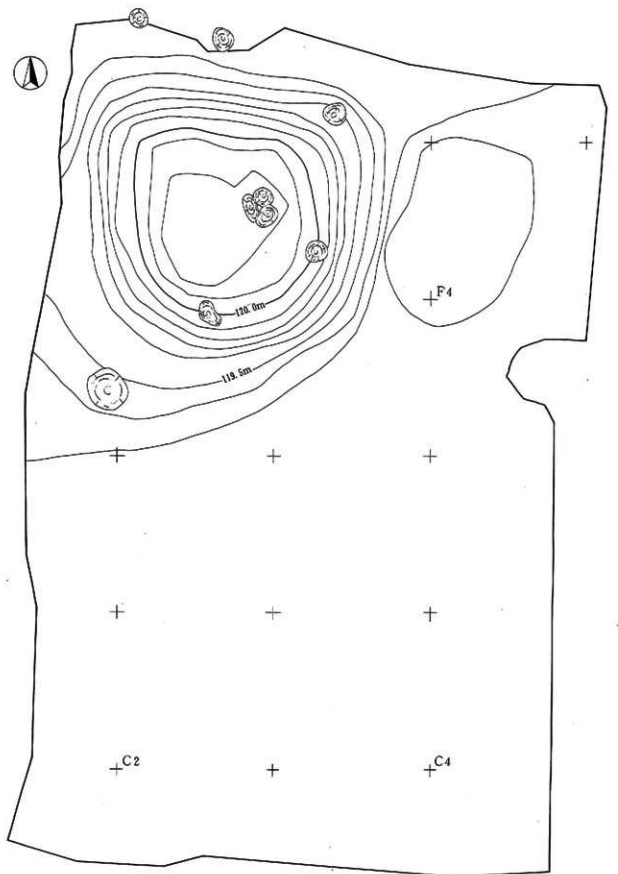
なお、出土遺物は16～19世紀代にわたるが、盛土下より出土の少量のかかわらけ以外は表土層中に混在し、層位的或は平面的なまとまりは確認できなかった。また、どのような信仰の対象とされていたものかを示す手がかりも認め得なかった。

遺物（第14～21図、図版6～8）

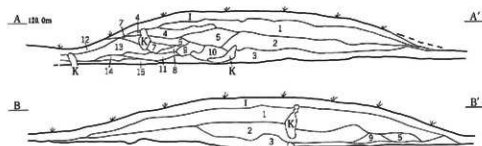
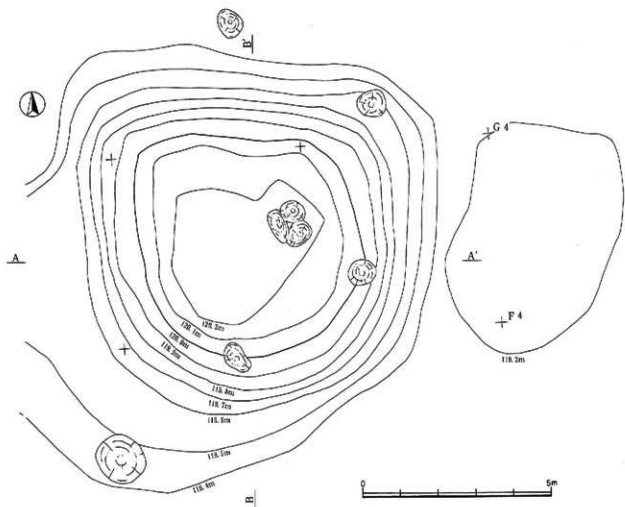
a かかわらけ

かわらけは118点を図示した。かわらけは法量、器形、胎土等により数種類に別けることが可能であるが、口径が4.4cmから9.8cmの間を1mm刻みに推移しているため、明確な区分けはできない。ちなみに現代の神前に備える小皿の分類に従えば、出土遺物は1寸5分から3寸までの小皿と考えられよう。かわらけの個々の法量は第2表によることとして、遺物を観察した結果についていくつかの特徴を列記することとする。

2～5は胎土、焼成とも他のかわらけに比べ良好である。体部は、糸切り痕の外側から緩やかに立ち上がっている。糸切り痕の外側には細い溝が回っている。これは「折り返し技法」の痕跡である可能性が高い。1は2～5と同様な胎土をもっているが、底部に焼成前の穿孔が認められる。12・13・21・33・51は内壁立りに溝が認められる。80・81・82・83は体部が外反して立ち上がり、口縁部は珠縁状を呈し、器肉が厚く、内容量が少ない皿状をしている。85・86・87は体部下半が反るようにして外反し、底部径が他のかわらけに比べて小さく、断面形が逆台形をしている。98・99は器肉が厚く、口縁部は珠縁状を



第11图 1号塚確認状況全体图



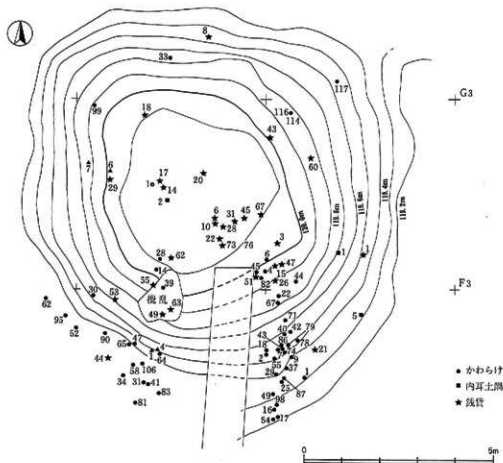
1号塚

- 1.黒褐色土(10YR2/3)細り混い
- 2.黒色土(10YR2/1)赤色P(磁器含む)
- 3.暗褐色土(10YR3/3)細り混い
- 4.1と類似。ローム雑を少量含む。
- 5.2と類似。赤色P含まない。
- 6.1とロームの6:3の混合土
- 7.1とロームの6:2の混合土

8.1とロームの6:4の混合土

- 9.5と同様。細り強い。
- 10.2と同様。細り強い。
- 11.1と類似。細り強い。
- 12.暗褐色土(10YR3/3)細り混い。
- 13.8と類似。ローム雑少量含む。
- 14.黒色土(10YR2/1)赤色P(磁器含む)
- 15.黒(黒褐色土(10YR1/7)赤色P少量含む)

第12図 1号塚



第13図 1号塚遺物出土状況図

呈する。底部は粘土塊から切り離す際に切り離したままか、底部外周の調整は認められず極端に角張っている。102は大きさの割には体部の器肉が薄く、口縁部は摘み上げられている。104・105は体部外面下端に稜が認められ、全体的に碗形を呈する。107・108は体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部は珠縁状を呈し、器肉がやや厚い。

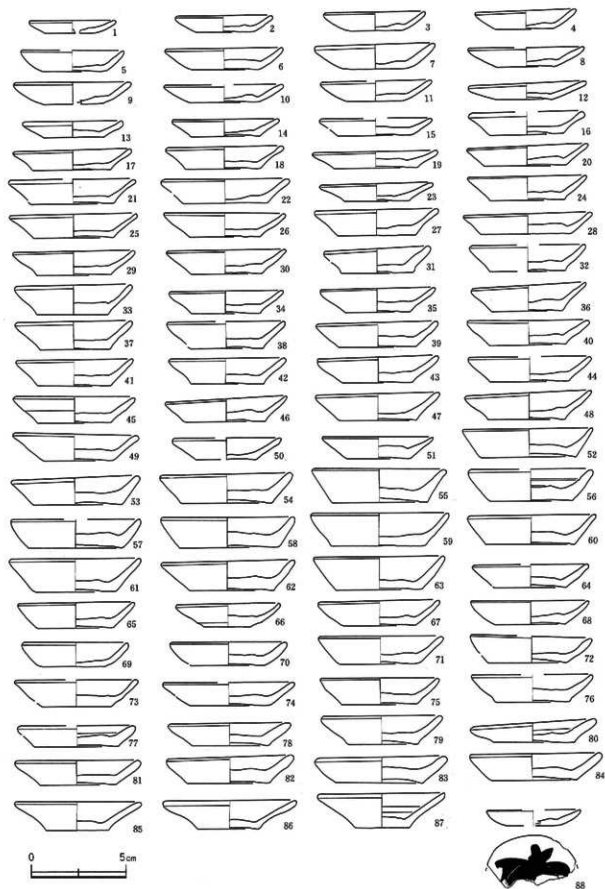
以上、思うが仮に、かわらけの特徴を列記してきた。これらの特徴からでは、かわらけの年代観・産地等は言及し得なかった。かわらけは東京都区内の江戸遺跡から多くが出土しているがいずれの資料からも、今回出土した遺物は極小との記述があるのみで多くを調べ得なかった。これは、これらのかわらけが生活用具として使われたものではなく、神前等に供えるためのものであったと考えられる。

b 内耳土鍋

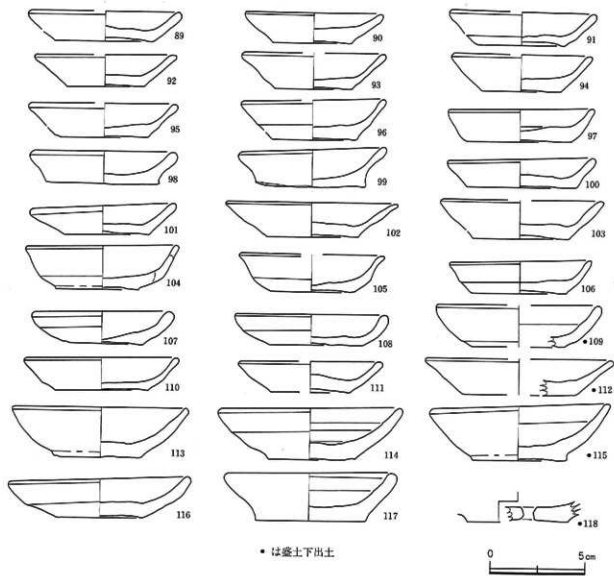
内耳土鍋は5点を図示した。完成品は認められないため、全てが復元実測である。体部はやや内湾しながら立ち上がり、口縁部は平らである。耳は口縁部から体部下半に付けられ、軸がやや斜めに付けられている。1は半分ほどが磨り減ったものや擦り切れたものがある。5の耳は断面板状を呈する。いずれも2：2の四耳式と考えられる。詳細は第3表に記す。

c 陶磁器

塚の周辺より出土した陶磁器類を図示する。何れも破片で、完成品は認められない。詳細は第4表に記す。



第14図 かわけ (1)



第15図 かわけ (2)

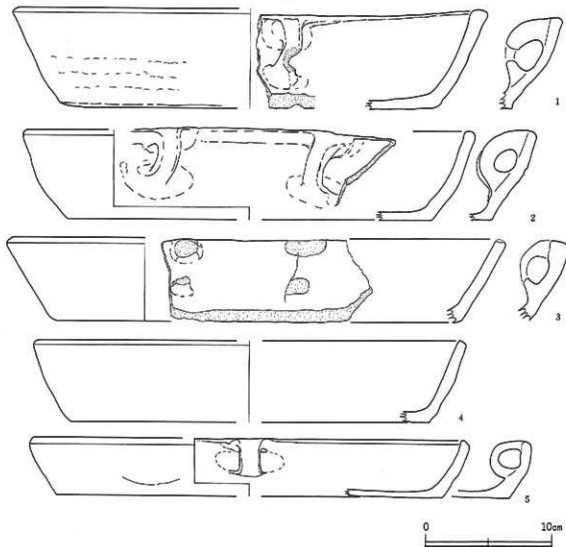


第16図 かわらけ底部拓図

第2表 かわらけ計測表

(単位cm)

| 番号 | 口径 | 器高 | 底径 | 底:口 | 高:口 | 角 度 | 重さ | 色調 | 胎土 | 焼成 | 備考 | 法量 |
|----|------|------|-----|-------|-------|-------------|------|-----|--------|----|-------|------|
| 1 | 4.4 | 0.7 | 2.8 | 1.571 | 6.286 | 41° 11' 9" | 8.7 | 橙 | 微砂 | 普通 | 底部穿孔 | |
| 2 | 5 | 0.9 | 3 | 1.667 | 5.556 | 41° 59' 13" | - | 橙 | 赤粒 | 普通 | | 1寸5分 |
| 3 | 5.25 | 1 | 2.5 | 2.1 | 5.25 | 36° 1' 38" | - | 橙 | 良 | 良 | | " |
| 4 | 5.2 | 1.1 | 4 | 1.3 | 4.727 | 61° 23' 22" | 11.1 | 橙 | 微砂 | 良 | | " |
| 5 | 5.3 | 1.1 | 3.4 | 1.559 | 4.818 | 49° 11' 5" | - | 橙 | 良 | 普通 | | " |
| 13 | 5.1 | 0.9 | 3.1 | 1.645 | 5.667 | 41° 59' 13" | 12.2 | 浅黄橙 | 微砂 | 普通 | | " |
| 14 | 5.5 | 0.9 | 3.6 | 1.528 | 6.111 | 43° 27' 6" | 13.5 | 明赤褐 | 微砂 | 良 | | " |
| 31 | 5.4 | 1.4 | 3.8 | 1.421 | 3.857 | 60° 15' 18" | 18 | 明赤褐 | 角閃石 | 普通 | | " |
| 50 | 5.6 | 1.1 | 3.2 | 1.75 | 5.091 | 42° 30' 37" | - | 橙 | 角閃石 | 普通 | | " |
| 51 | 5.7 | 1.15 | 3.3 | 1.727 | 4.957 | 43° 46' 52" | 20.5 | 橙 | 細砂 | 普通 | | " |
| 66 | 5.4 | 1.3 | 2.5 | 2.16 | 4.154 | 41° 52' 40" | 13.6 | 明赤褐 | 微砂 | 良 | | " |
| 69 | 5.4 | 1.3 | 3 | 1.8 | 4.154 | 47° 17' 26" | - | 橙 | 角閃石 | 普通 | | " |
| 88 | 4.8 | 0.85 | 2.5 | 1.92 | 5.647 | 36° 28' 9" | - | 橙 | 良 | 普通 | 黒書 | |
| 11 | 5.8 | 1.1 | 2.5 | 2.32 | 5.273 | 33° 41' 24" | - | 橙 | 良 | 普通 | | 2寸 |
| 6 | 6.1 | 1.2 | 3.5 | 1.743 | 5.083 | 42° 42' 33" | 17.3 | 橙 | 石英 | 普通 | | " |
| 7 | 6.2 | 1.4 | 3.4 | 1.824 | 4.429 | 45° | 22.3 | 橙 | 微砂 | 良 | | " |
| 8 | 6 | 1.05 | 3 | 2 | 5.714 | 34° 59' 31" | - | 橙 | 良 | 普通 | | " |
| 9 | 6 | 1.2 | 3.2 | 1.875 | 5 | 40° 36' 4" | - | 橙 | 微 | 良 | | " |
| 10 | 6.2 | 0.9 | 3.4 | 1.824 | 6.889 | 32° 44' 6" | - | 橙 | 良 | 普通 | | " |
| 12 | 6.1 | 0.95 | 2.9 | 2.103 | 6.421 | 30° 41' 59" | - | 橙 | 微砂 | 普通 | | " |
| 15 | 5.8 | 0.9 | 3.8 | 1.526 | 6.444 | 41° 59' 13" | - | 明赤褐 | 石英・角閃石 | 普通 | | " |
| 16 | 5.8 | 1.2 | 3.8 | 1.526 | 4.833 | 50° 11' 39" | - | 明赤褐 | 微砂 | 普通 | | " |
| 17 | 6 | 1.1 | 4.1 | 1.463 | 5.455 | 49° 11' 5" | - | 橙 | 赤粒 | 普通 | | " |
| 18 | 6 | 1.2 | 4 | 1.5 | 5 | 50° 11' 39" | 16.3 | 浅黄橙 | 微砂 | 普通 | | " |
| 19 | 6.4 | 0.9 | 4.4 | 1.455 | 7.111 | 41° 59' 13" | 20.6 | 橙 | 石英・角閃石 | 普通 | | " |
| 20 | 6.25 | 1.2 | 4.3 | 1.453 | 5.208 | 50° 54' 22" | - | 橙 | 細砂 | 普通 | | " |
| 21 | 6.5 | 1.3 | 4.3 | 1.512 | 5 | 49° 45' 49" | - | 橙 | 細砂 | 普通 | 25と同種 | " |
| 22 | 6.5 | 1.3 | 4.4 | 1.477 | 5 | 51° 4' 20" | - | 明赤褐 | 微砂 | 普通 | | " |
| 23 | 5.8 | 1 | 3.3 | 1.758 | 5.8 | 38° 39' 35" | - | 明赤褐 | 角閃石 | 普通 | | " |
| 24 | 6.2 | 1.3 | 4 | 1.55 | 4.769 | 49° 45' 49" | - | 明赤褐 | 角閃石 | 普通 | | " |
| 25 | 6.6 | 1.3 | 4.2 | 1.571 | 5.077 | 47° 17' 26" | - | 橙 | 微砂 | 普通 | | " |
| 26 | 6.3 | 1.3 | 3.7 | 1.703 | 4.846 | 45° | 21.7 | 橙 | 石英・角閃石 | 普通 | | " |
| 27 | 6.3 | 1.4 | 4.1 | 1.537 | 4.5 | 51° 50' 33" | - | 暗赤褐 | 微砂 | 普通 | | " |
| 28 | 6.6 | 1.2 | 4.7 | 1.404 | 5.5 | 51° 37' 57" | 25.1 | 橙 | 角閃石 | 普通 | | " |
| 29 | 6.2 | 1.3 | 3.8 | 1.632 | 4.769 | 47° 17' 26" | 19.6 | 明赤褐 | 角閃石 | 普通 | | " |
| 30 | 6.2 | 1.3 | 3.7 | 1.676 | 4.769 | 46° 7' 23" | 20.1 | 橙 | 微砂 | 良 | | " |
| 32 | 5.9 | 1.4 | 4 | 1.475 | 4.214 | 55° 50' 25" | - | 明赤褐 | 細砂 | 普通 | | " |
| 33 | 6 | 1.6 | 3.7 | 1.622 | 3.75 | 54° 17' 35" | 24.7 | 明黄褐 | 微砂 | 普通 | | " |
| 34 | 5.9 | 1.2 | 3.7 | 1.595 | 4.917 | 47° 29' 22" | 18.1 | 橙 | 石英 | 普通 | | " |
| 35 | 5.9 | 1.3 | 3.5 | 1.686 | 4.538 | 47° 17' 26" | 21.1 | 橙 | 角閃石 | 普通 | | " |
| 36 | 5.9 | 1.5 | 3.7 | 1.595 | 3.933 | 53° 44' 46" | 21 | 橙 | 角閃石 | 普通 | | " |
| 37 | 6 | 1.5 | 3.7 | 1.622 | 4 | 52° 31' 25" | 18.6 | 明赤褐 | 微砂 | 良 | | " |
| 38 | 6.1 | 1.4 | 3.8 | 1.605 | 4.357 | 50° 35' 57" | - | 橙 | 細砂 | 普通 | | " |
| 39 | 6.2 | 1.4 | 4 | 1.55 | 4.429 | 51° 50' 33" | 19.8 | 橙 | 石英・角閃石 | 普通 | | " |
| 40 | 6.3 | 1.3 | 4.1 | 1.537 | 4.846 | 49° 45' 49" | 23.9 | 橙 | 石英・角閃石 | 普通 | | " |
| 41 | 6 | 1.5 | 3.8 | 1.579 | 4 | 53° 44' 46" | 22.8 | 明赤褐 | 微砂 | 良 | | " |
| 42 | 6 | 1.4 | 3.9 | 1.538 | 4.286 | 53° 7' 48" | 19.4 | 明赤褐 | 石英・角閃石 | 良 | | " |
| 43 | 6.2 | 1.4 | 3.7 | 1.676 | 4.429 | 48° 14' 22" | 24.4 | 橙 | 石英・角閃石 | 良 | | " |
| 44 | 6.3 | 1.3 | 4.2 | 1.5 | 4.846 | 51° 4' 20" | - | 明赤褐 | 角閃石 | 普通 | | " |
| 45 | 6.2 | 1.4 | 3.8 | 1.632 | 4.429 | 49° 23' 55" | 21.7 | 橙 | 細砂 | 普通 | | " |
| 46 | 6.3 | 1.4 | 4.3 | 1.465 | 4.5 | 54° 27' 44" | 24.9 | 明赤褐 | 石英・角閃石 | 普通 | | " |
| 47 | 6.4 | 1.5 | 4 | 1.6 | 4.267 | 51° 20' 24" | 21.2 | 橙 | 微砂 | 良 | | " |
| 48 | 6.5 | 1.5 | 4 | 1.625 | 4.333 | 50° 11' 39" | - | 明赤褐 | 石英 | 普通 | | " |
| 49 | 6.4 | 1.5 | 3.5 | 1.829 | 4.267 | 45° 58' 15" | 20.8 | 浅黄橙 | 石英・角閃石 | 普通 | | " |
| 53 | 6.6 | 1.5 | 4.6 | 1.435 | 4.4 | 56° 18' 35" | 35.2 | 橙 | 石英・角閃石 | 普通 | | " |
| 56 | 6.4 | 1.7 | 4.4 | 1.455 | 3.765 | 59° 32' 4" | - | 黒褐 | 細砂 | 普通 | | " |
| 57 | 6.7 | 1.5 | 4.9 | 1.367 | 4.467 | 59° 2' 10" | - | 橙 | 石英 | 普通 | | " |
| 60 | 6.6 | 1.6 | 4.7 | 1.404 | 4.125 | 59° 18' 1" | - | 橙 | 石英・角閃石 | 普通 | | " |
| 61 | 6.7 | 1.8 | 4.2 | 1.595 | 3.722 | 55° 15' 19" | - | 橙 | 角閃石 | 普通 | | " |



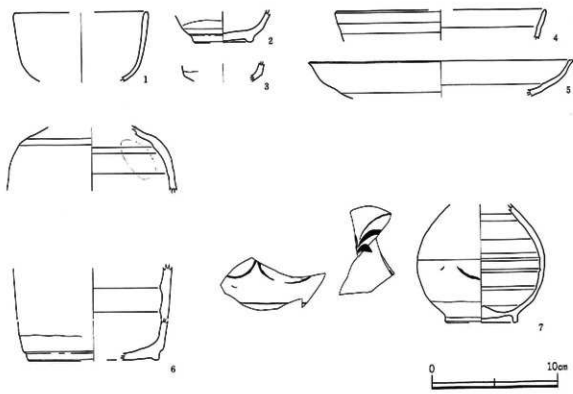
第17図 内耳土鍋

第3表 内耳土鍋観察表

| 番号 | 口径 | 器高 | 底径 | 色調 | 胎土 | 焼成 |
|----|------|-----|------|----|-------------|----|
| 1 | 36.5 | 8 | 30.5 | 橙 | 角四石, 3~4 礫 | 普通 |
| 2 | 35.6 | 7.1 | 29.2 | 橙 | 白粒, 赤粒, 角四石 | 普通 |
| 3 | 38.8 | 6.7 | 32.8 | 橙 | 細砂, 4 礫 | 普通 |
| 4 | 33.6 | 6.5 | 28.6 | 橙 | 石英, 細砂 | 良 |
| 5 | 34.3 | 4.6 | 30.9 | 橙 | 石英, 細砂 | 良 |

第4表 陶磁器観察表

| 番号 | 器種 | 種別 | 口径 | 底径 | 産地 | | 年代 | 備考 | 出土位置 |
|----|----|----|------|-----|-------------|----------|-------------------|--------|-------|
| 1 | 鉢 | 陶器 | 10.5 | - | 瀬戸・美濃 | 灰釉(御深井釉) | 18世紀前半 | 京・信楽系カ | No.55 |
| 2 | 丸鍋 | 陶器 | - | 4.7 | 瀬戸・美濃 | 鉄釉 | 18世紀前半 | | 南西 |
| 3 | 香炉 | 陶器 | - | - | 瀬戸・美濃 | 灰釉 | 18世紀末 | | 南東 |
| 4 | 鉢 | 陶器 | 16.7 | - | 瀬戸・美濃 | 灰釉 | | | 南西 |
| 5 | 皿 | 磁器 | 21.4 | - | 肥前 波佐見(木場山) | 青磁・口繪 | 17世紀後半(1650~1690) | | 北西 |
| 6 | 德利 | 陶器 | 10.4 | - | 瀬戸・美濃 | 灰釉 | 18世紀前半 | | 試掘 |
| 7 | 瓶 | 磁器 | - | 5.5 | 肥前 波佐見 | 染付 草花纹 | 18世紀 | | 南東 |



第18図 陶磁器



第19図 土人形

d 土人形

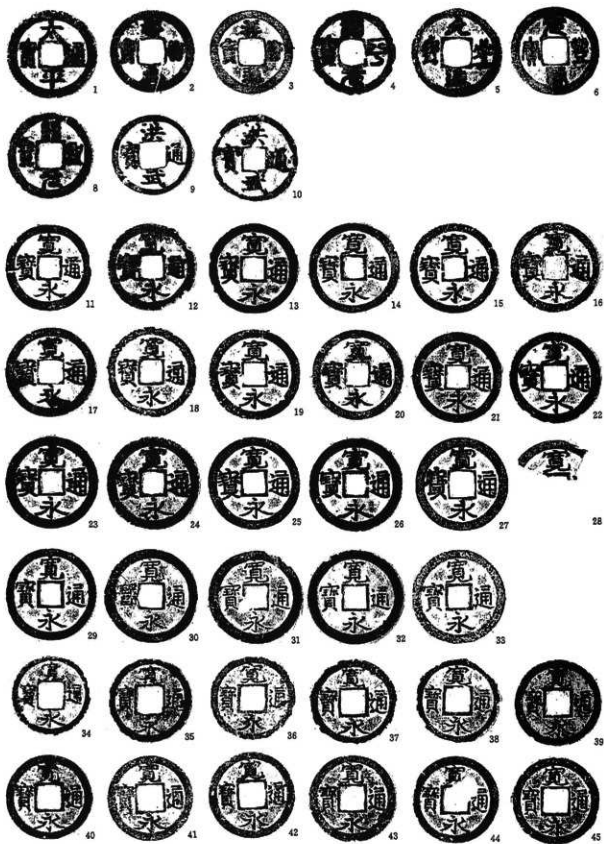
1号塚の周りから他の遺物とともに、土人形が出土し、7点を図示した。1・2・3・5は恵比須天、4は大黒天、6は千手観音風の仏像、7は馬上の中国風の武人像である。1は全高18.5cm、全幅13.4cmである。背中に背負った綱の一部を欠損するほか、ほぼ完形である。前面が形抜きで作られ、背面は板状の粘土が当てられている。下部は開いており、中が中空である。2・3は頭部破片である。やはり形抜きで作られているが、表面がきれいに整形されている。5は頭部片。形抜きで造られたと考えられるが、表面がはがれたような痕跡が認められる。4は全高11.5cm、全幅7.7cmである。俵の一部が剥離しているがほぼ完形である。前後が形抜きで作られ、側面で接合されている。中は中空。小槌の表面に一部赤彩が残る。6は頭部と光背の一部を欠損する。前面が形抜きで作られ、背面は板状の粘土が当てられる。下部は開いており、中が中空である。7は馬の頭部と足を欠損する。前後が形抜きで作られ、中実である。馬の後ろ足の付け根から人物の腹部にかけて小孔が開いているが、これは使用に際して棒を差した穴と考えられる。

e 銭貨

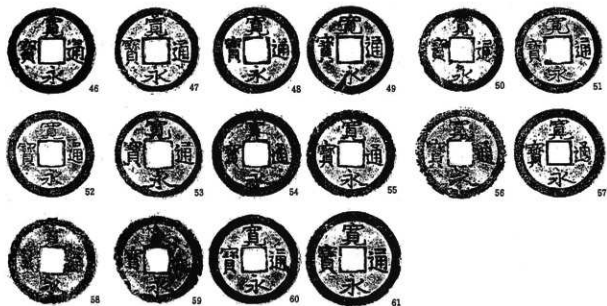
76点が出土した。その内訳は渡来銭が10枚、寛永通宝（古）が18枚、寛永通宝（文銭）が5枚、寛永通宝（新）28枚、寛永通宝（鉄銭、判読不明も含む）7枚、半銭1枚、その他銭種不明7枚である。初鋳年の最も古いのは太平通宝（1）で976年、最も新しいものが半銭（64）1877年（明治10年）である。渡来銭は銭文の状況、材質等から全てが中国産のものとは言い切れず、一部模倣銭の可能性もある。

第5表 銭貨計測表

| 番号 | 銭文 | 背文 | 初鋳年 | 輪外径 縦 | 輪外径 横 | 輪内径 縦 | 輪内径 横 | 郭外幅 縦 | 郭外幅 横 | 郭内幅 縦 | 郭内幅 横 | 銭厚 | 重量 | 出土 位置 | 備考 |
|----|------|----|---------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|------|-----|----------|------|
| 1 | 太平通宝 | | 976 | 24.00 | 24.00 | 18.55 | 18.40 | 7.75 | 7.15 | 5.95 | 5.75 | 1.20 | 2.7 | No.27 | |
| 2 | 祥符元宝 | | 1009 | 22.50 | 22.75 | 17.90 | 18.05 | 7.90 | 7.95 | 6.35 | 6.55 | 0.90 | 1.3 | 南西 | |
| 3 | 祥符元宝 | | 1009 | 22.60 | 22.60 | 17.35 | 17.60 | 7.60 | 7.85 | 6.65 | 7.00 | 1.30 | 1.6 | No.108 | |
| 4 | 治平元宝 | | 1064 | 23.15 | 22.75 | 18.45 | 18.20 | 7.50 | 7.90 | 7.30 | 7.25 | 1.00 | 1.9 | 表採 | |
| 5 | 元豊通宝 | | 1078 | 24.30 | 24.25 | 19.50 | 20.15 | 8.20 | 8.40 | 7.10 | 7.25 | 1.00 | 2.3 | 南西 | |
| 6 | 元豊通宝 | | 1078 | 23.95 | 23.85 | 19.00 | 19.10 | 7.80 | 8.00 | 6.70 | 6.75 | 1.00 | 2.2 | No.103 | |
| 7 | 不明 | | | 22.75 | 22.50 | -- | -- | -- | -- | -- | -- | -- | -- | 南西 | |
| 8 | 紹聖元宝 | | 1094 | 23.20 | 23.15 | 18.20 | 18.30 | 8.00 | 8.05 | 6.50 | 6.25 | 1.15 | 2.6 | No.10 | |
| 9 | 洪武通宝 | | 1368 | 21.60 | 21.60 | 18.10 | 18.10 | 7.25 | 7.20 | 6.70 | 6.80 | 1.10 | 1.2 | 北東 | |
| 10 | 洪武通宝 | | 1368 | 23.50 | 23.45 | 19.20 | 19.60 | 7.15 | 7.20 | 5.85 | 5.90 | 1.30 | 2.3 | No.102 | |
| 11 | 寛永通宝 | | 1636 | 23.30 | 23.35 | 17.95 | 18.00 | 6.60 | 6.70 | 5.30 | 5.20 | 1.05 | 2.1 | 表採 | 古寛永 |
| 12 | 寛永通宝 | | 1636 | 23.50 | 23.55 | 18.60 | 18.95 | 6.95 | 7.15 | 5.75 | 5.50 | 1.10 | 2.0 | 南西 | 古 |
| 13 | 寛永通宝 | | 1636 | 24.15 | 24.15 | 19.40 | 19.45 | 7.00 | 7.20 | 5.50 | 5.50 | 1.00 | 2.6 | 南西 | 古 |
| 14 | 寛永通宝 | | 1636 | 24.15 | 24.20 | 19.75 | 19.30 | 7.00 | 7.20 | 5.60 | 5.35 | 1.20 | 2.3 | No.53 | 古 |
| 15 | 寛永通宝 | | 1636 | 24.15 | 24.10 | 19.30 | 19.40 | 7.05 | 6.85 | 5.30 | 5.40 | 1.25 | 2.7 | No.22 | 古 |
| 16 | 寛永通宝 | | 1636 | 24.20 | 24.20 | 19.50 | 19.70 | 6.85 | 5.90 | 5.35 | 5.25 | 1.25 | 3.1 | 南西 | 古 |
| 17 | 寛永通宝 | | 1636 | 24.25 | 24.25 | 19.20 | 19.40 | 6.85 | 7.25 | 5.60 | 5.95 | 1.00 | 2.3 | No.54 | 古 |
| 18 | 寛永通宝 | | 1636 | 24.40 | 24.25 | 19.60 | 19.30 | 7.10 | 7.10 | 5.50 | 5.40 | 1.50 | 3.3 | No.6 | 古 |
| 19 | 寛永通宝 | | 1636 | 24.40 | 24.50 | 19.85 | 19.60 | 6.85 | 6.90 | 5.75 | 5.50 | 1.25 | 3.1 | 南西 | 古 |
| 20 | 寛永通宝 | | 1636 | 24.40 | 24.35 | 19.60 | 19.35 | 7.00 | 7.00 | 5.75 | 5.60 | 1.10 | 2.7 | No.99-1 | 古 |
| 21 | 寛永通宝 | | 1636 | 24.45 | 24.50 | 19.45 | 19.45 | 6.70 | 7.00 | 5.55 | 5.75 | 1.20 | 3.2 | No.49 | 古 |
| 22 | 寛永通宝 | | 1636 | 24.65 | 24.60 | 19.40 | 19.45 | 7.75 | 7.70 | 6.10 | 5.85 | 1.25 | 3.1 | No.105 | 古 |
| 23 | 寛永通宝 | | 1636 | 24.90 | 24.90 | 19.40 | 19.55 | 7.05 | 7.00 | 5.25 | 5.30 | 1.20 | 3.5 | 南西 | 古 |
| 24 | 寛永通宝 | | 1636 | 25.00 | 24.95 | 19.60 | 19.65 | 7.15 | 7.20 | 5.50 | 5.50 | 1.15 | 2.8 | 南西 | 古 |
| 25 | 寛永通宝 | | 1636 | 25.00 | 24.85 | 19.80 | 19.75 | 7.00 | 7.40 | 5.50 | 5.80 | 1.20 | 2.4 | 北西 | 古 |
| 26 | 寛永通宝 | | 1636 | 25.15 | 25.10 | 19.75 | 19.40 | 7.20 | 6.80 | 5.25 | 4.75 | 1.10 | 2.8 | No.88 | 古 |
| 27 | 寛永通宝 | | 1636 | 25.25 | 25.25 | 19.80 | 19.95 | 7.60 | 7.80 | 6.45 | 6.45 | 0.95 | 2.6 | 南西 | 古 |
| 28 | 寛永通宝 | | 1636 | -- | -- | -- | -- | -- | -- | -- | -- | -- | -- | No.106 | 古 |
| 29 | 寛永通宝 | 文 | 1668 | 25.00 | 25.00 | 20.45 | 20.15 | 7.30 | 7.30 | 5.40 | 5.40 | 1.35 | 3.5 | No.3 | |
| 30 | 寛永通宝 | 文 | 1668 | 25.15 | 25.20 | 20.00 | 19.90 | 7.25 | 7.05 | 5.70 | 5.60 | 1.15 | 2.9 | 南西 | |
| 31 | 寛永通宝 | 文 | 1668 | 25.20 | 25.15 | 19.90 | 19.70 | 7.00 | 7.20 | 5.70 | 5.85 | 1.25 | 3.3 | No.16 | |
| 32 | 寛永通宝 | 文 | 1668 | 25.40 | 25.40 | 20.15 | 20.15 | 7.20 | 7.35 | 5.75 | 5.55 | 1.30 | 3.1 | No.99-2 | |
| 33 | 寛永通宝 | 文 | 1668 | 25.60 | 25.55 | 20.35 | 20.20 | 7.30 | 7.30 | 5.60 | 5.70 | 1.30 | 3.1 | 北東 | |
| 34 | 寛永通宝 | | 1804~12 | 21.70 | 21.75 | 17.85 | 17.75 | 7.70 | 7.60 | 6.80 | 6.80 | 1.00 | 1.9 | 南東 | 隆中龍角 |
| 35 | 寛永通宝 | | 1697 | 22.30 | 22.30 | 18.25 | 18.40 | 7.70 | 8.10 | 7.00 | 6.80 | 1.00 | 1.7 | 南西 | |



第20圖 錢寶 (1)



第21図 銭貨(2)

| 番号 | 銭文 | 背文 | 初鋳年 | 輪外径 | 輪外径 | 輪内径 | 輪内径 | 莖外径 | 莖外径 | 莖内径 | 莖内径 | 銭厚 | 重量 | 出土位置 | 備考 | |
|----|------|----|-------|-------|-------|-------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|----------|----|
| | | | | 縦 | 横 | 縦 | 横 | 縦 | 横 | 縦 | 横 | | | | | |
| 36 | 寛永通宝 | | 1697 | 22.60 | 22.95 | 19.05 | 18.75 | 7.60 | 7.75 | 6.25 | 6.00 | 1.10 | 2.4 | 南西 | | |
| 37 | 寛永通宝 | | 1697 | 22.70 | 22.85 | 18.50 | 18.60 | 7.95 | 7.35 | 6.20 | 5.80 | 1.00 | 1.7 | 南西 | | |
| 38 | 寛永通宝 | | 1697 | 22.75 | 22.25 | 18.85 | 18.60 | 8.10 | 7.90 | 6.50 | 6.60 | 1.00 | 1.3 | 南西 | | |
| 39 | 寛永通宝 | | 1697 | 22.90 | 23.00 | 18.90 | 18.80 | 7.85 | 7.70 | 6.25 | 6.40 | 0.95 | 2.0 | 南西 | | |
| 40 | 寛永通宝 | | 1697 | 23.00 | 23.00 | 18.50 | 18.80 | 7.85 | 7.60 | 6.00 | 6.05 | 1.20 | 2.8 | 南西 | | |
| 41 | 寛永通宝 | | 1708 | 23.00 | 23.10 | 18.65 | 18.40 | 7.75 | 7.90 | 7.10 | 7.15 | 0.90 | 2.2 | 南東 | 深川亀戸 | |
| 42 | 寛永通宝 | | 1708 | 23.10 | 23.10 | 18.85 | 18.40 | 7.60 | 7.70 | 7.00 | 7.10 | 0.90 | 1.9 | 南東 | 深川亀戸 | |
| 43 | 寛永通宝 | | 1708 | 23.20 | 23.15 | 18.90 | 18.85 | 7.55 | 7.65 | 6.00 | 6.35 | 1.05 | 2.1 | No7 | 深川亀戸 | |
| 44 | 寛永通宝 | | 1708 | 23.20 | 23.10 | 18.50 | 18.75 | 8.00 | 7.80 | 5.85 | 6.10 | 0.85 | 1.5 | No71 | 深川亀戸 | |
| 45 | 寛永通宝 | | 1697 | 23.35 | 23.30 | 19.10 | 18.90 | 7.50 | 7.80 | 6.30 | 6.50 | 1.00 | 1.9 | No104 | | |
| 46 | 寛永通宝 | | 1697 | 23.05 | 23.10 | 18.60 | 18.50 | 7.25 | 7.30 | 0.85 | 6.00 | 1.05 | 2.0 | 南西 | | |
| 47 | 寛永通宝 | | 1697 | 23.20 | 23.00 | 18.90 | 18.90 | 7.40 | 7.65 | 5.80 | 5.80 | 1.35 | 2.8 | 南西 | | |
| 48 | 寛永通宝 | | 1697 | 23.25 | 23.35 | 18.35 | 18.30 | 7.65 | 7.50 | 5.65 | 5.75 | 1.10 | 2.5 | No23 | | |
| 49 | 寛永通宝 | | 1697 | 23.40 | 23.40 | 19.15 | 19.00 | 7.50 | 7.40 | 6.00 | 6.00 | 1.00 | 2.1 | No98 | | |
| 50 | 寛永通宝 | | 1697 | 22.95 | 23.25 | 18.00 | 18.15 | 7.00 | 7.25 | 5.55 | 5.65 | 1.35 | 3.0 | 南西 | | |
| 51 | 寛永通宝 | | 1740頃 | 23.30 | 23.45 | 18.75 | 18.95 | 7.80 | 7.60 | 6.30 | 6.45 | 1.00 | 2.0 | No19 | 紀州鹿の尾 | |
| 52 | 寛永通宝 | | 1697 | 23.35 | 23.40 | 18.40 | 18.45 | 7.25 | 7.55 | 5.90 | 5.85 | 1.00 | 2.5 | 南西 | | |
| 53 | 寛永通宝 | | 1697 | 23.60 | 23.55 | 19.60 | 19.40 | 8.00 | 8.45 | 6.30 | 6.20 | 1.00 | 2.5 | No59 | | |
| 54 | 寛永通宝 | | 1697 | 23.70 | 23.70 | 18.40 | 18.35 | 6.80 | 7.05 | 5.75 | 6.00 | 1.10 | 2.6 | 南西 | | |
| 55 | 寛永通宝 | | 1697 | 23.90 | 23.85 | 18.70 | 18.50 | 7.30 | 7.30 | 5.85 | 6.10 | 0.90 | 1.9 | No63 | | |
| 56 | 寛永通宝 | | 1697 | 24.55 | 24.55 | 19.75 | 19.85 | 7.30 | 7.40 | 6.25 | 6.05 | 1.05 | 2.7 | 南東 | | |
| 57 | 寛永通宝 | | 1697 | 24.40 | 24.40 | 19.25 | 19.25 | 7.15 | 7.00 | 5.90 | 5.60 | 1.20 | 2.5 | 南西 | | |
| 58 | 寛永通宝 | | 1697 | 23.50 | 23.75 | 18.60 | 18.55 | 7.25 | 7.10 | 6.15 | 6.05 | 1.00 | 2.1 | 北東 | | |
| 59 | 寛永通宝 | | 1697 | 23.70 | 23.95 | 19.40 | 18.80 | 7.25 | 7.60 | 6.35 | 5.70 | 1.00 | 2.1 | 南西 | | |
| 60 | 寛永通宝 | | 1697 | 24.25 | 24.25 | 19.35 | 19.25 | 6.85 | 7.10 | 5.75 | 5.75 | 1.15 | 2.8 | No8 | | |
| 61 | 寛永通宝 | | | 26.80 | 25.85 | 20.30 | 20.35 | 7.00 | 7.30 | 5.60 | 5.65 | 1.25 | 3.8 | 南 | | |
| 62 | 不明 | | | 24.25 | 23.50 | - | - | - | - | - | - | 2.45 | 3.9 | No87 | 鉄銭 | |
| 63 | 不明 | | | 20.3 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | No100 | | |
| 65 | 不明 | | | 28.15 | 27.7 | - | - | - | 10 | - | 6.05 | 2.3 | 3.3 | 南東 | 鉄銭 | |
| 66 | 寛永通宝 | | 1739 | 26.5 | 26 | - | 20.6 | 10.1 | 10.3 | 6.35 | 6.5 | 2.25 | 2.9 | No100 | 鉄銭 | |
| 67 | 不明 | | | 24.1 | 24 | - | - | - | - | - | - | 4.7 | 1.45 | 3.3 | No107 | 鉄銭 |
| 68 | 不明 | | | 23.35 | - | - | - | - | - | - | - | 1.7 | 3.8 | 南西 | 鉄銭 | |
| 69 | 不明 | | | 23.15 | 22.85 | - | - | - | - | 6.1 | 6.2 | 2.45 | 2.8 | 南西 | 鉄銭 | |
| 70 | 寛永通宝 | | | 24.3 | 23.8 | - | - | - | 7.2 | - | 2.2 | 2.6 | 南西 | 鉄銭 | | |
| 71 | 不明 | | | 22.35 | 22.1 | - | - | - | - | 6.5 | 6.8 | 1.1 | 1.3 | 南東 | | |
| 72 | 不明 | | | 21.75 | 21.6 | - | - | - | - | 6.15 | 6.1 | 1.1 | 1.6 | 北西 | | |
| 73 | 不明 | | | 23.35 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | No101 | | |
| 74 | 不明 | | | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | | 73は渡来銭か。 | |
| 75 | 不明 | | | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | | | |
| 76 | 不明 | | | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | | | |
| 84 | 半銭 | | 1877 | 22.40 | 22.40 | - | - | - | - | - | - | 1.25 | 3.2 | 南 | | |

Ⅲ まとめ

今次調査区は前述のように、440㎡と塚部分約80㎡の計520㎡を調査した結果、縄文時代前期より近世(近代初頭)にわたる複合遺跡であった。そこで、当地における土地利用の変遷を略記しまとめとする。

(1) 縄文時代

縄文時代の遺構は、堅穴住居跡1軒(SI-2)と土坑5基である。このうち、平面形が隅丸長方形の2基(SK-2・4)は、遺物の出土はなかったものの、埋積土中に今市・七本桜軽石粒を多く含み、非常に硬く締まるなどの特徴から早期末～前期頃に属すると推察される。所謂「陥し穴」的な性格のものと思われる。

堅穴住居跡は、西側が調査区外に延び、北西部が古代の住居跡に切られるなど部分的な調査であり、さらに明確な堅穴の掘り込みや柱穴も確認できず、規模形状を明らかにできなかった。また、確りした石囲い炉が設けられていたものの、その内部にほとんど焼土等が遺存せず、出土遺物も僅かに土器片1片のみであった。本跡は出土土器片より、中期後葉と推察される。なお、この住居跡の南東12～15mにはほぼ同時期と推定される土坑が3基(SK1・5・8)が所在した。これらのうち最も遺存状態の良好なSK-1は、開口部が径90cm程の円形で、壁が部分的にオーバーハングしており、本来は小振りな袋状土坑であったと推察され、埋積土中より数片の土器片が出土した。他2基も遺物の出土はないが、規模・形状から同様の遺構と思われる。したがって、該期には小規模な集落が営まれたものの、継続性はなく比較的短期であったと考えられる。

また、遺構に伴わず後世の溝や、土坑などの埋積土中より、前期や晩期頃の土器片が出土しており、これらの時期にも何らかの土地利用があったことが知られる。

(2) 古代東山道跡について

古代の遺構としては、堅穴住居跡1軒(SI-1)、溝2条(SD-1・2)、土坑3基などがある。

先ず2条の溝のうち東側の太いSD-1は、かつて上野遺跡第Ⅱ次調査区で確認された、東山道の側溝と推定される3条の溝のうち最も東側に位置するSD-1の延長と判断される。この溝は第Ⅰ次調査区ではSD-2とほぼ平行するものの、第2次調査区の南端付近より他の2条とは平行せず東にそれて直線的に150m程延び、今次調査区の中程で約10度西偏して北進する。これは、このまま直進し台地東縁の凹地に到るのを避ける為と推察される。当地区では、北端断面で上幅3.5m、深さ1.1m、底幅0.85mで、断面逆台形であった。なお、この溝の西約2mに(芯々では3m)に位置し、ほぼ並走するように設けられたSD-2は、上幅約1mと前者の2分の1ほどで、深さも50cmとやや浅い断面V字型の溝である。この2条の溝は前述のように規模・断面形等が異なるものの、配置や埋没状況から同時併存の可能性が高い。SD-1は該期の遺物が認められなかったが、SD-2は北端の埋積土上層より9世紀後半の須恵器坏が出土している。また、両者とも上部の埋積土が非常に硬く締まっており一時道として利用されたものと推察されるが、両者の間及びこの西側に本来の明確な路面は確認できなかった。また、上野遺跡ではSD-2に対応する溝が確認されておらず、両地区の間で始まるか、西から延びて北に屈曲したものと推察される。

なお、前述の上野遺跡の報告では、このSD-1が東にそれて広がることの可能性として、当地が「衣川

駅家」の比定地であることから、駅家に近接したため道幅が広がったとの見方を示している。また、SD-1の東側で確認された、掘立柱建物跡や所謂「氷室」状土坑等の存在も傍証資料としてあげている。残念ながら、明確な官衛的施設はいまだ確認されておらず、今次調査区でもこれを強く裏付ける資料は得られなかった。

ただ、今回はSD-1の東側にのみ古代の遺構が見られたが、今回は、SD-1・2の西側に平安時代の堅穴住居跡（SI-1）が確認された。本跡は大部分が西の調査区外に延びるもの、南北長3.8mで東壁の中央やや南寄りにカマドが築かれていた。また、カマドは住居の廃絶に際して意識的に破壊されたと見られるが、カマド付近より須恵器片、土師器壺などが出土し9世紀後葉の住居跡と推定される。本跡の特徴として床面の段差がある。南から北に向って、南・中・北と順次10cm程づつ高くなっていった。確認当初、建て替え・重複を想定し追及したが、土層に変化が見られず、床面に点在した炭化物が全体に分布することから最終段階までこの状態であったと判断されたが、その性格については確認できなかった。かつて南東方約7kmの「みずほの緑の郷」開発に際して東山道跡の所在確認のため延べ2.4kmのトレンチにて試掘調査を実施した。残念ながら東山道跡を確認できなかったものの、新規の古代集落跡の西刑部上原遺跡を確認し、この遺跡で調査した堅穴住居跡のうち2軒がカマドを境に東と西で床面に10～15cm程の高低差が認められた。偶然やも知れないが、ともに東山道ルートに近隣して存在する点で興味深く今後の課題としたい。

本跡は前述のように9世紀後葉と考えられることから、側溝がほぼ埋没した段階で駅家の道幅の減少や若干の移動が行われ、堅穴住居の構築が可能な状況になったと判断される。また、今次調査区で確認した該期の3基の土坑のうち、南東部に所在した2基の土坑（SK-6・7）は、明確な柱痕跡や柱当りを確認できなかったが、埋積土の状況から掘立柱建物跡の柱掘方の感を受ける。両者は約5.2mの間隔（芯々）で東西に並び、間隔が広すぎるが両者の間や周辺にこれらと組み合わせる柱穴は認められなかった。南側は現道の切り通しで削平されていて確認できないが、対応する柱穴が存在した可能性も全く否定できないであろう。前記の上野遺跡第Ⅱ次調査区においても、柱間の広い槽的な掘立柱建物跡（調査区外に展開の可能性もあり）の存在が確認されており、当地区のものも類似の施設と推考する。

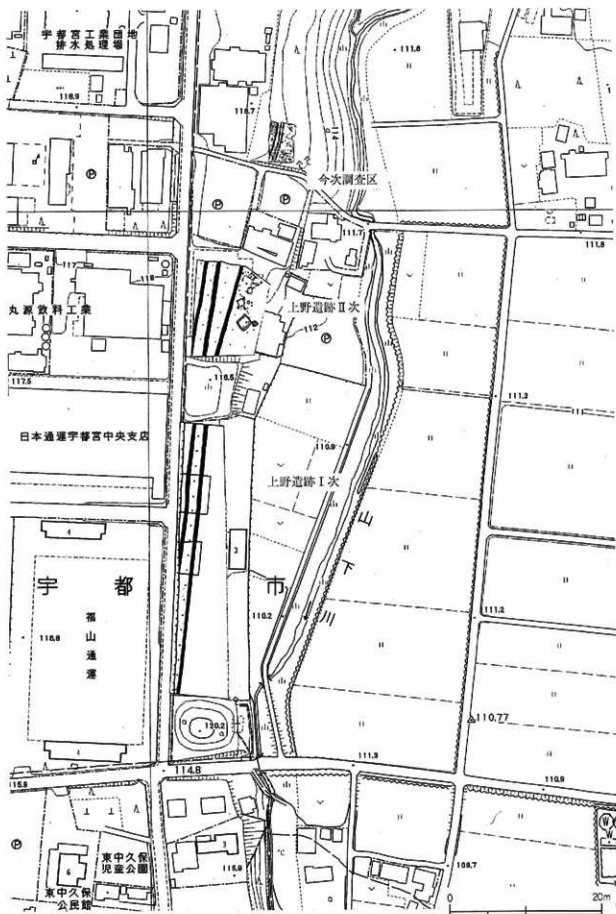
いずれにせよ、「東山道跡」の所在、「衣川駅家」の所在地を求めての調査であったが、駅家の所在地、SD-1が東に大きく離れた理由は今回も謎のままと言わざるを得ない。今回はこれに、SD-1に並走するSD-2の性格という疑問が加わり、明確な路面も確認できなかった。

また、当地付近を「衣川駅家」の比定地とする説が大勢を占める中、より鬼怒川の渡河地点に近い「日枝神社南遺跡」付近を比定地とする説（木本・1996）もあり、更なる資料の蓄積に期待したい。

(3) 免の内台1号塚について

中・近世の遺構としては塚1基（免の内台1号塚）のみである。

先に、その名称については、周知の遺跡としての登録名「免の内台古墳」にちなむもので、地名（小字名等）や塚に関する伝承などとは無縁のものであることを明記する。なお、前述の如く遺跡の東下方には「木の川」という小字名が残り、「免の内」という小字名は北東方約800mに所在する。また、他にも同種の塚が近隣に存在する可能性を想定して1号塚と名称したが、現在も自然地形が残る調査区の周囲から北側の一帯を踏査したが、本跡以外の塚は確認できなかった。既に開発されている南と西側については明確にしがたいものの、単独で存在した可能性が高い。



調査区と同じ台地の東縁で南方約1.5kmに周知の遺跡として山下台高塚群（第1図6・2基）があり、東方の沖積地を望む台地縁辺に点在するように塚が築かれていたと推察される。

この塚は、径10mほどの円墳と登録されていたが、今次調査で現況測量を行った結果では平面が一辺10m程の方形で高さ12m、頂部に一辺5m程の同形の平場を持つと見られた。しかし、調査の進捗に伴い黒色・黒褐色土を主体に盛られており、塚の平面形や規模を類推しえるような溝や付属施設は設けられていないことが判明した。また、遺物の出土状況に視点を置いて表土除去したところ、南半部では半円形になると見られたが、北半部は現況測量の状況と大差ない。これは、本来円形に築かれた塚が後世に手が加えられて方形になったものと推察される。この塚は、調査区の北西隅に所在するが、西と北は逆L字状に地権者が異なっていることと関係するのやも知れない。

この塚の特筆すべき点として、出土遺物の豊富さが挙げられる。他所と比べ当地の人々の信仰心が厚かったと見るべきか、かわらけ、内耳土鍋、素焼き人形、陶磁器、銭貨など多様である。最も多いのが御神酒を供えたかわらけ類で、16世紀後半代から近世、或は近代初頭の長期間に渡るものと推察される。中世末～近世初期のものは径8～9cmでやや肉厚であるが、主体を占める近世のものは径5～6cmで肉薄のものである。図示したのは118点ほどであるが、破片の量からこの数倍が存在したと推察される。

次が御賽銭として供えられた銭貨で、江戸時代の寛永通宝を主体とするが、北宋の太平通宝を最古、明の洪武通宝を最新とする渡来銭や明治10年の半銭銅貨も見られた。寛永通宝は大部分が銅銭1文で、一部鉄銭1文も含まれるが4文銭は認められなかった。江戸の土葬墓より出土する所謂「六道銭」では、鉄銭や4文銭の出土量が流通している割合に比べ極端に少ないことから、「六道銭」には銅銭1文をと言う意識が存在したと見る向きもある。本跡の場合、表土層中に混在し腐食が進行して破損した鉄銭が多かったことから、本来はさらに鉄銭の割合が高かった可能性が高い。しかし、単独の御賽銭に4文銭を使用しなかったのかもしれない。

また、銅銭、鉄銭どうし、鉄銭と銅銭が各2枚が甕で融着したものがあり、単独の御賽銭とは異なり安産祈願や願い事成就に伴う「包銭」として供えたものもあったことが知られる。

さらに、塚の前で供養の会食に使用したのか、点在した内耳土鍋の破片を復元したところ数個体の存在が確認できた。その中には長期に使用したためか、耳が把手のひもで磨り減って半分ほどになったものや耳が剥離したものも見られた。径は34～39cm、深さ5～8cmでの内面の耳は2個づつが対になる4耳式と判断される。时期的には16世紀後半～17世紀初頭と推定される。

また、少数ながら国産の陶磁器類が出土している。肥前波佐見産の青磁皿、同産の染付磁器瓶、瀬戸・美濃系の陶器徳利、香炉、丸碗、鉢、信楽・京焼系陶器碗などである。青磁の皿が17世紀末葉、他は概ね18世紀代と推定され、口鏝の施された青磁の皿は出土例の少ない貴重品と見られる。

特徴的な遺物として素焼き人形がある。そのほとんどが型造りの恵比須・大黒天であるが、胎土や表現の粗密、大きさなどに著しい差が見られ、産地等も様々と推察される。残念ながら資料の蓄積に乏しく個々の年代観を示すにはいたっていない。胎土にかかわらけとの類似性を見出せるものもあり、在地産のみならず他地域からの搬入品と見られるものも認められた。かつてはほとんどの家庭の神棚に恵比須・大黒天の土・木人形が祀られていたと思うが、県内ではこれとは別に台所・納戸の戸棚内に恵比須・大黒天を祀る例があるという。（柏村・1981）この他に「馬上の中国風の武人像」、頭部と光背を欠損した「千手観音風の仏像」なども出土している。これらの土人形が買い替えや破損などで不要になった場合、信仰の対象であったものを粗末に扱えず塚に納めた（後述）と推察される。

これほど盛んに供養を行ってきた痕跡の明瞭な塚であるが、ではいかなる信仰の対象であったのか、発掘調査の結果からは明確にし難い。

かつてこの塚の上もしくは周囲に多数の石造物が造立されていたが、信仰する人々の集落の分離に伴って、2ヶ所に分割して移設したと伝えられる。その時期は明確でないが、明治十年の半銭銅貨の出土から近代始め頃と推察される。そこで、塚の性格を知る手がかりを求めこれらの石造物を追跡した。

一群は、遺跡の南東方約0.5km、中平出公民館北側の八幡社の南西脇に7基の石造・石塔・石祠が、もう一群は北北東約0.5km免の内公民館北側の大杉明神の西隣と北東に4基の石祠が所在した。

中平出には石祠4基、石仏2基、石塔1基で、建立年の判るものは勢至菩薩像の二十三夜塔が天明二年(1782)、十九夜塔(文字と如意輪観音像)が明治19年(1886)、石祠の台座に明治4年(1871)の年号が見られた。明治19年の十九夜塔の台座には施主として14名の姓名が刻まれており、姓は石原、吉沢、渡辺、田崎、枝野、字塚、矢田部、柏藏の8氏で、ほとんどが現在も当地に見られる。なお、一般に十九夜講は女人講であり、施主もしくは願主として女性名が刻まれている例が多いが、本例は全て男性で戸主名が刻まれたと推察される。また、全国的には二十三夜塔が大勢を占めるといわれるが、昭和45年に栃木県教育委員会により実施された石仏の緊急調査の報告書「下野の野仏」によれば、二十三夜塔602基に対し十九夜塔が1,599基で2.4倍に及ぶ。上記の調査は野仏の調査であり、寺社仏閣の境内は除かれており、今次報告のものも対象から外れている。したがって、栃木県内にはいかに多数の十九夜塔が存在するか類推し得る。ちなみに県内で最も多いのが馬頭観音で2,132基を数え、十九夜塔がこれに次ぐもので、地藏尊や庚申塔よりも多いという結果が報告されている。

この十九夜塔の西に、青面金剛像の下に三猿を刻んだ庚申塔が並んでいるが残念ながら建立年は不明である。

次に免の内の石祠はいずれも紀年銘等は認められないが、大杉明神(石殿で明治24年の銘あり)の西脇の1基は、他より大振りで構造も異なる。身舎の部分が幅73.5cm、奥行60cm、現存高87cm、これに幅104cm、高さ36cmの屋根がのる。身舎は上下2段になっていて、上半部に広い空間を持つ。この石祠は、不用になった恵比須・大黒天の土人形を納めるもので、近年まで祠の周辺は土人形が散見されたとのことであるが、調査時には認められなかった。前述の多数の素焼きの像は、この石祠に納めるために持ち込まれたものであり、直接塚の信仰に結びつくものではないと推察される。しかし、県内では「エビスッコ」(夷譚?)と称して1月20日と10月20日に恵比須・大黒様の祭りが行われている。

さらに、これらとは別に本開発の事業主で地権者でもある石原家(明治2年以前は吉沢姓という)が現在も当地にお祀し、工事終了まで自宅敷地内に仮移設している5基の石造物が所在した。移設前は、調査区南東隅の東隣に所在し、奥に3基の石祠が南向きに、手前西側に石仏と石塔が東面していた。石祠については明確にし難いが、その手前の石塔は明治8年(1875)建立の「勝善神」(文字塔)で、北関東から東北南部に多く見られる馬の神である。かつて、農耕や交通、物流に大きな役割を果たした馬の安全と供養の為であろう。また、この隣に並ぶ石像は、その形状や馬の神の勝善神と並べられていることから、馬頭観音の可能性が高い。頭上の「宝馬」や「馬口印」の印相が明確でないことから、庚申塔の主尊「青面金剛」の可能性も全くは否めないが、現段階では馬頭観音と推定する。

以上のように、塚上もしくは周辺に造立されていたと伝えられる石造物からは当時流行していた多様な民間信仰の一端が窺い得た。

『日本石仏辞典』(庚申懇話会編・1996)の信仰の部の中で小花波六平氏は「つかと塚(庚申塚)」の

項で、「庚申の供養には石造物のほか、木の枝を立てたり土盛の小高い塚を築く場合がある。」とし、庚申塔（石製）、塚（土盛）、つか（木の枝）の区別を提唱している。また、齋徳忠博士の『庚申信仰の研究』の付章「庚申塚」と「塚」の項から栃木県の例を上げ「矢板市、大田原市、茂木町、喜連川町（現さくら市）、烏山町（現那須烏山市）、黒羽町（現大田原市）、馬頭町・小川町（ともに現那珂川町）に土盛の庚申塚が見られる。」とする。県北部から北東部にかけての分布が確認されているが、前記の「下野の野仏」の結果と同様調査の進捗によっては、県内各地に広がるものと推察される。

なお、この免の内台1号塚に関しては庚申塚の可能性は高いものの、念仏供養等を含めた複合的な信仰の対象であったと考えたい。

最後に、本県の近世史分けても農村史に造詣の深い阿部 昭 国士館大学教授が近世の農民（農村）の休日（休日、やすみび）に関する論考（阿部・1988）の中で、「近世中後期の村の休日制度は村に伝統的に継承されてきた年中行事の諸慣行を基礎として成立したものであるが、画一的に固定されていたわけではなく、休日の増加を求める村民の動きや、逆にそれを警戒する領主の干渉を多少とも受けつつ、その年々の諸条件を勘案しながら、村寄り合いによってかなり自在に編成されていたのであった。」とし、領主側の干渉例として、寛保元年（1741）11月の宇都宮藩の定目書の第七～第九条を示し、「神事仏事に事寄せ、月に何度も〔こと（休日）〕を唱えて遊ぶ風潮に対する領主の警戒の態度よく現れている。」と記す。第九条には「供養塚や石碑の建立は無益」との指摘も見られ、やや長くなるが以下に引用する。

（第七条）

一村々鎮守祭礼、或ハ風祭雨乞等二事寄せ大勢寄会酒盛遊び候様ニ相間候、其村因窮之様子ニより為取統之当分相止候歟、又ハ随分事軽ク初祭迄ニ可致事、

（第八条）

一祝事又ハ仏事等二付大勢集候茂堅ク停止之訳有之、親類五人組之内寄合候義者可為格別候事、

（第九条）

一日待庚申待之儀、其人之祈祷之様に申なし候得共、右二事寄せ座頭盲女迄呼遊候義不宜、其上物を入供養塚石碑など建候事無益成義ニ候、且月之中何ヶ度もこと与申村中遊候義、近年數多に相成候由相間候、五節句并鎮守祭り日之外相止メ可申候、往古方遊び來候訳有之候ハハ其段、相談可請差回候事

（ 横山隆一家文書、栃木県芳賀郡下高根沢村（現芳賀町）
寛保元年十一月「御定目書 今泉村々」

上記の御定目書は現芳賀郡芳賀町下高根沢地区のもので、当然同じ領内の当地にも示されたのであろうが、前述のようにこれより69年後の天明二年の二十三夜塔が見られたように相変わらず各種の石造物の建立が続けられていたことから、どの程度の実効性があったのか興味深い。

なお、前記の「下野の野仏」によれば本県の塔碑ベスト5（馬頭観音、十九夜塔、地藏尊、庚申塔、二十三夜塔）に限ってみても、御定目書の出された寛保元年（1741）以前の建立が622基に対し、寛保～慶応年間（1741～1867）の建立が2,799基、急増する享保年間（1716～1735）以降とそれ以前では3,155基対266基とその差はさらに顕著である。領主側の懸念をよそに民衆の石造塔碑の建立が活発化していったことが知られる。

この塚は、古代東山道の側溝と推定される溝の上に築かれていたが、前述の旧河内町日枝神社南遺跡でも同様の例が確認されており、塚と道路跡の関係は今後の課題としたい。



A. 調査区遠景西に日光連山を望む(東から)



B. 調査前(南西から)



C. 全景(南から)



D. 全景(北から)



E. S1-1・2(南から)



F. S1-2戸(南から)



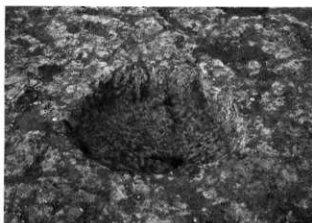
G. S K-1完掘(南東から)



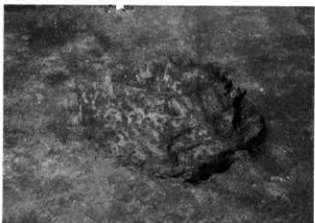
H. S K-2完掘(南東から)



A. SK-4完掘 (東から)



B. SK-5完掘 (南から)



C. SK-8完掘 (南から)



D. SI-1全景 (東から)



E. SI-1カマド (西から)



F. SD-1・2確認状況 (南西から)



G. SD-1・2完掘 (南から)



H. SD-1上面 (硬化) (南から)



A. S D-1北壁土層 (南から)



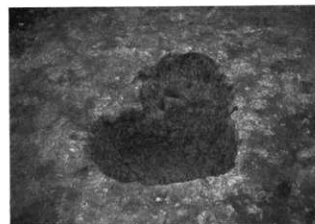
B. S D-1南壁土層 (北から)



C. S D-2遺物出土状況 (南から)



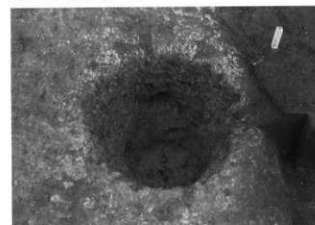
D. S D-2中央土層 (南から)



E. S K-6完掘 (東から)



F. S K-7完掘 (南西から)



G. S K-3完掘 (北から)



H. 1号塚全景 (南から)



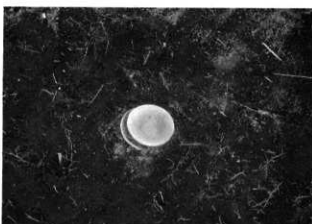
A. 1号塚北土層（北北西から）



B. 1号塚南土層（南南東から）



C. 1号塚南西部かわらけ出土状況（南西から）



D. かわらけ出土状況



E. 土人形出土状況



F. 中平出の石像物（南西から）



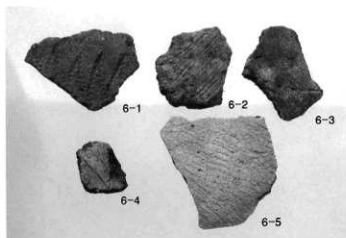
G. 恵比須・大黒を納める祠（南から）



H. 石原家の石像物（南東から）



4-1



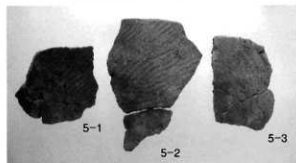
6-1

6-2

6-3

6-4

6-5



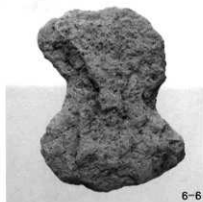
5-1

5-2

5-3



8-1



6-6



9-1



8-2



14-1



14-3



14-13



14-88



14-51



14-66



14-6



14-7



14-17



14-18



14-28



14-35



14-86



15-98



15-107



15-114



17-2



15-117



17-1



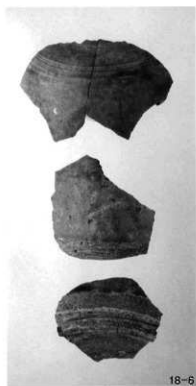
15-115



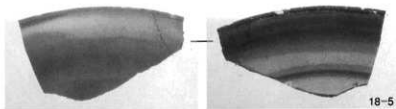
15-113



17-5



18-6



18-5



18-1



18-4



18-2



18-7



19-1



19-4



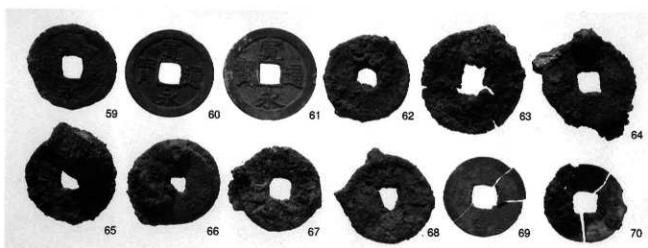
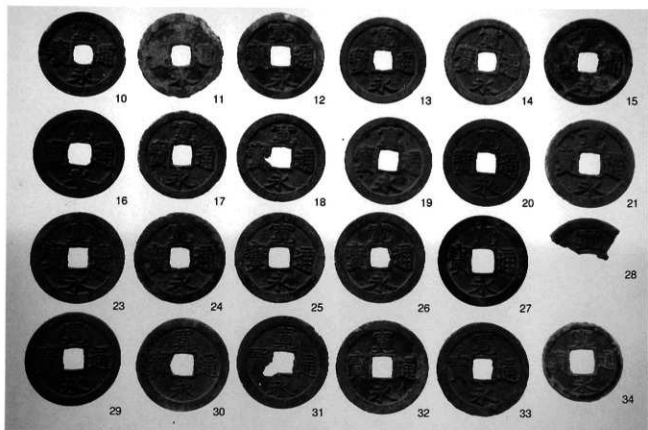
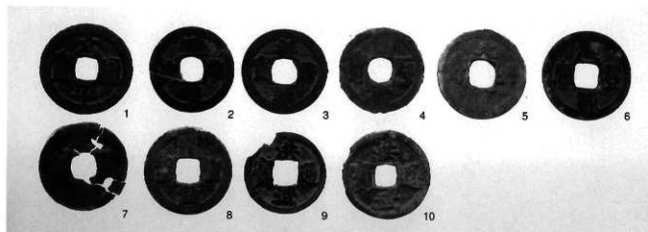
19-6



19-7



19-3



参考文献

- 土屋喜四郎 1931 「長者ヶ平の研究概観」『下野史談第8巻第6号』下野史談会
- 栃木県教育委員会事務局文化課 1973 「緊急砦塔類調査報告 下野の野仏」栃木県教育委員会
- 金坂清則 1978 「下野国」『古代日本の交通路Ⅱ』 大明堂
- 柏村祐司 1981 「しもつけのくらしとすまい」 下野新聞社
- 阿部 昭 1988 「近世における民衆の休日慣行とその論理」『人文学会紀要』第21号 国信大学文学部
- 中山 晋 1989 「付録 鴻野山地区推定東山道確認調査概要」『栃木県埋蔵文化財保護行政年報（昭和63年度）』 栃木県教育委員会
- 上田 真 1990 「研究篇 第7章 かわらけの歴年学的及び機能論的考察」『東京大学本郷構内の道跡—法学部4号館・文学部3号館 建設地道跡』 東京大学文学部
- 石川 均 1990 日枝神社南道跡・南古墳発掘調査報告書 河内町教育委員会
- 岡角まり 1994 「江戸在地系土器におけるロクロ技術の展開」『江戸在地系土器の研究Ⅱ』 江戸在地系土器研究会
- 井汲隆夫 1995 「第3節 市谷仲之町道跡第3次調査の「かわらけ酒」に関する考察」『市谷仲之町道跡Ⅲ』 新宿区道跡調査会
- 木本雅康 1996 「四＝東山道＝山坂を越えて－」『古代を考える古代道跡』 吉川弘文館
- 度申懇話会編 1996 『日本石仏事典（第二版二刷）』 雄山閣
- 永井久美男 1996 『日本出土銭総覧』 兵京原粗葦銭調査会
- シンポジウム古代国家とのろし実行委員会 1996 「シンポジウム古代国家とのろし—宇都宮市叢山城跡発見の雄跡をめぐって—」
- シンポジウム「古代国家とのろし」宇都宮市実行委員会・平川 南・鈴木靖民編 1997 「奥とぶひの道」 青木書店
- 市橋一朗・上三川勝 1997 「栃木県下の近世塚状遺構について」『唐澤考古』16 唐澤考古会
- 堀内秀樹 1997 「東京大学本郷構内における年代的考察」『東京大学構内道跡調査研究年報Ⅰ』1996年度 東京大学埋蔵文化財調査室
- 今平利幸 1998 『上野道跡』 宇都宮市教育委員会
- 亀田幸久 1999 『杉村北道跡』 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 今平利幸 1999 『飛山城Ⅲ』 宇都宮市教育委員会
- 藤田典夫・安藤美保 2000 『杉村・磯岡・磯岡北』 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 山名教之 2001 『東山道—都へつづく一本の道』 栃木県教育委員会
- 深谷 昇・柴木 誠 2003 『上神主・茂原宮前道跡』 上三川町教育委員会・宇都宮市教育委員会
- 板橋正幸他 2007 『長者ヶ平道跡』 栃木県教育委員会・(財)とき生誕学習文化財団埋蔵文化財センター
- 水野順敏・柏崎伸博 2008 「西刑部上原道跡」『みずほの台道跡群Ⅱ』 宇都宮市教育委員会

拙筆にあたり、事業主石原一男氏とご家族様の学術に対する御理解を高く評価するとともに、調査・報告書作成に対してご助力を賜った方々に深く深謝申し上げる次第である。

報告書抄録

| | | | | | | | | |
|----------------------------|--|------|------|----------------|------------------|--------------------|---------------------------|--------|
| ふりがな | ひらいでめんのうちだいいせき | | | | | | | |
| 書名 | 平出免の内台遺跡 | | | | | | | |
| 副書名 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 宇都宮市埋蔵文化財調査報告書 第75集 | | | | | | | |
| 編著者名 | 水野龍敏・三輪孝幸 | | | | | | | |
| 編集機関 | 佛日本窯業史研究所 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒324-0611 栃木県那須郡那珂川町小砂3112 TEL.0287-93-0711 | | | | | | | |
| 発行機関 | 宇都宮市教育委員会 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒320-8540 栃木県宇都宮市旭1丁目1番5号 TEL.028-632-2768 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 2010(平成22)年3月31日 | | | | | | | |
| ふりがな | ふりがな | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| 所収遺跡名 | 所在地 | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| ひらいでめんのうちだいいせき 平出免の内台遺跡 | ちらひでめんとうちだいいせき 栃木県宇都宮市 ひらいでめんとうちだいいせきの 平出町字上野 | | | 36° 33' 51" | 139° 56' 8" | 2009.10.5 -11.5 | 520㎡ | 共同住宅建設 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺跡 | | 主な遺物 | | 特記事項 | |
| 平出免の内台遺跡 | 集落 | 縄文時代 | 住居跡 | 1軒 | 土器・石器 | | 古代東山遺跡の側溝と考えられる溝跡を2条確認した。 | |
| | | 平安時代 | 住居跡 | 1軒 | 須恵器・土師器類 | | | |
| | 古代道路 塚 | 中・近世 | 道路 | 2条 | 須恵器・坪 | | 中・近世の塚より多数の遺物が出土。 | |
| | | | 塚 | 1基 | かわらけ、内耳土鍋、土人形、鉄貨 | | | |

宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第75集

平出免の内台遺跡

発行日 平成22年3月31日

編集 株式会社 日本窯業史研究所

〒324-0611

栃木県那須郡那珂川町小砂3112

TEL.(0287)93-0711

発行 宇都宮市教育委員会文化課

〒320-8540 宇都宮市旭1-1-5

TEL.(028)632-2764

印刷 株式会社 松井ビ・テ・オ・印刷